吳 核訂·訳注

兴 Wu Xiuzhe

	俗語類字謎類	骨牌名類	曲牌類	詩・詞・曲類	人名類	地名類	官名類	大明律類	書名類	古文類	書句類	凡例	はじめに
			:	:		:	:	:	:	:			
		i	i	i	i	i	i	i	i	i	i	i	i
		i	i	i	i	i	i	i	i	i	i		
								:					
		:	:	:	:	:	:	:		:	:	:	:
: :	: :	÷	:	÷	:	:	:	:	÷	:	:	:	÷
			:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	
		:						:				:	
167 137 1	29 109	$\dot{105}$	97	81	73	6 7	61	55	47	37	13	<u>i</u> 0	4

はじめに

が貼られており、「この行燈に書かれたなぞなぞの答えはな~んだ?」とクイズが出されている。 る一つのリツイートを見かけたからである。そこには、清代木版年画「暖香塢試製春燈謎」の一部を拡大した画像 UKIYO-E」という展示が行われた。筆者がその展示に気付いたのは、 二〇二二年九月二三日から一一月二〇日、日中友好会館美術館において「~珠璧交輝~清代木版年 東方書店の公式ツイッターアカウントによ 画十

暖香塢に雅やかに春燈謎を製る」に出てくるものではなくて、ひいては、ほかの回に見られる燈謎でもない。 日用類書所載燈謎を参照に補った文字。明らかな誤字は()内で訂正した。後ろの数字は本書における掲載番号 の全体図をもとに、そこに入っている燈謎をすべて探し出してみた(画像の右から左。[]は年画上にないが にいえば、 その謎には見覚えがある。ただ、年画のタイトルに反して、『紅楼夢』第五十回「蘆雪庭に争って即景詩を聯ね 『紅楼夢』とは無関係である。その後、展示図録を入手し、公式ツイッターに挙げられている当該年画

〈天井の燈籠

である)。

- ②自家夫配自家妻 打大明律語 89
- ③撇了爹娘去做官 打大明律語

90

⑩蟾宮一口小明塘

一枝鉄箭射南方

二十四条花巷走

巷々能会做文章

(卓上の燈籠)

⑨立在 [一人之下]

202

〈扉・壁〉

④位在万人之 [上]

⑤ <u>£</u>i. ⑥孩児今夜必然生 (吾) 児之子有施為 202

⑧世間田地都占了 ⑦四朝落地就能行 打一古人名 打一古人名 打一古人名

打一古人名

124 123 123

113

(<u>11)</u> 人 打一使物 277

打一〔三ヵ〕 薬名 (出処未定)

⑫三人同日去観花 禾火二人相対坐 夕陽橋下一双瓜 百友元来共一家

打一菓名 252 (人物が手に持っている燈籠・紙)

打四字

198

⑬従今一去不回

5

- ⑭師生終日商量事 打四書一名 73
- ⑤三十歳後始読書 生来半百方始学

打四書二名

73

体は清嘉慶年間(一七九六―一八二〇)に天津楊柳青に製作されたものである。 結果はこのとおり、全一五題のうち一四題が明末日用類書に収録されている。 この事実から、 図録の解説によると、この年画自 明代流行りの燈謎

は少なくとも清中葉まで民衆の日常生活に深く浸透していたことがわかる。

明に残っているからではなくて、謎を解くために必要な背景知識が今日においても日中両国間で広く共有されてい 謎詩である。この一作が選ばれた理由は右に記した全一五題を見れば察せるのであろう。おそらく、 るからではないだろうか。 日中友好会館美術館がクイズとしてツイッターにあげたのは、この中の⑫番、「春夏秋冬」の四文字を当てる字 単に文字が鮮

実は、 昨年だけでこの謎とは三回遭遇した。 既述の木版年画以外に、 資料収集で新たに得た情報をここで紹介し

ておきたい。

蒙学如可至也(高調佳なりといえど、斯文を弘むる所以にあらず。今や世と人を論ぜず、その近浅なるを抜きて傍 わちこの「春夏秋冬」の謎である。序文にある「高調雖佳、非所以弘斯文。今也不論世与人、拔其近浅而訓詁于傍′ より刊行されたこの本には、字謎詩が四首(本書19・19・72・18番と同じもの)入っており、そのうち一首がすな その一つは龍谷大学写字台文庫所蔵、 都賀庭鐘編 『近詩選』である。文化元年(一八〇四)三月に大坂の定學堂

都賀庭鐘も江戸に持ち渡された日用類書、 記『過目抄』には、数多な漢籍から得た豊富な教養が詰まっている。『過目抄』の抄録書目一覧には入っていないが、 文選集であり、『一夕話』の第五巻には計二○○題前後(版本によって増減する)の「雅謎」が収録されている。 ち渡された記録が残っている。『一夕話』と『又一夕話』は清代において繰り返し翻刻されていた咄咄夫による雑 向井富編 ることがわかる。 話し、蒙学如しには至る可しなり)」ということばから、タイトルの「近詩」は「近浅な詩」という意味であ に採録された四首中の三首(本書19・19・18番)もそこに含まれる。 「商舶載来書目」に、 編者である都賀庭鐘(一七一八―一七九四)は、 享保十二年(一七二七)に『一夕話』一部六本、『又一夕話』一部五本 あるいは当時の漢籍謎集を読んでいた可能性は十分にある。 初期読本作者として名高い。 彼が残した読書筆 が日本に持

中国からの漂着船 よる応酬がしばしばあった。「銚子浦漂着清人の書」も乗組員が日本に残した文化交流のあかしだと推測できる。 にわたり、 そこには文化四年(嘉慶一二年=一八〇七)に日本に漂着した中国人が書いた詩文が記されている。 もう一つは、小宮山楓軒(一七六四―一八四〇)の筆録 そのうち、 「山村詠懐」 (唐船) 福州出身の林朝文が書いたのは、まさにこの「春夏秋冬」の字謎詩である。 から、元曲『琵琶記』の科白、 の乗組員と筆談役を務めた日本儒者の間に、お互いの関心事を聞く「筆語」や漢詩文に 清初の才子佳人小説 『楓軒偶記』に見られる「銚子浦漂着清人の書」である。 『平山冷燕』に書かれている詩など 江戸期において、 内容は宋代の

文政九年(一八二六)春に中国寧波から遠州清水港に漂着した得泰船の船主と代官羽倉氏の間で行った「清水水 字詩謎」(本書15番)を自身の考証随筆『海録』巻十二「一七・謎第二」に抄録しただけでなく、同じ条の頭注に、 以上二点の資料より二、三十年ほど遅れて、江戸の雑学者山崎美成(一七九六―一八五六)は、『近詩選』 から「極

「隠語」を披講し、そこで中国の隠語や謎語などを『猜彙』に抄録してあると言及した。 清」「寧波波寧」という対句のかけあいをも記した。さらに、美成は滝沢馬琴、山崎北峰らが発起した兎園会で、

るで一本の細い糸をたどって手繰り寄せたこれらの資料に、一種の奇妙な懐かしさを覚える。 先月、国立国会図書館の古典籍資料室で、わたしはついに『猜彙』と題されるその手記と対面したのである。ま

根付いたちょっとした知的な遊び。それでも、たしかに海を渡ってきた、時を越えてきた謎たちである。 華麗な文芸ではない、まだそのような文芸になろうともしなかった、浅近で、学童向けのもの。日常生活の片隅に 作成した本書をきっかけに、燈謎のプロトタイプともいえるこれらの作品をより多くの人に触れてほしい。 体謎」はやがて淘汰され、忘れ去られた。願わくは、拙著『燈謎! 中国では、清末以降、精緻化した「今体謎」が謎人によって大量に創作され、明末日用類書に収録されている「古 ――漢字文化圏文字遊戯の諸相』の副読本として

1〇二三年二月 呉 倏

[\dashv] https://twitter.com/JCFC_Museum/status/1578933804986957824′ https://pbs.twimg.com/media/Fd8 常化五〇周年記念展「~珠璧交輝~清代木版年画+ UKIYO-E」』公益財団法人日中友好会館、二〇二二年九 vgvBaMAEVcqZ?format=jpg&name=large(最終閲覧:二〇二三年二月一三日)、展示図録『日中国交正

- [2]『紅楼夢』に書かれている燈謎については、『燈謎-二〇二三年二月、八二―九五頁)を参照されたい。 漢字文化圏文字遊戯の諸相』第三章第二節(文学通信
- [3]木越治「本を楽しむ 都賀庭鐘の読書筆記『過目抄』のことなど」『書物学 = Bibliology』2、 二〇一四年五月、五五—五九頁。 勉誠出版
- [4]劉菲菲『都賀庭鐘における漢籍受容の研究:初期読本の成立』、和泉書院、二〇二一年三月、二一一―
- [5]大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』、関西大学東西学術研究所、一九六七年、六六〇頁。
- [7] 大庭脩『漂着船物語:江戸時代の日中交流』、岩波書店、二〇〇一年八月、二二七―二二九頁。 [6] 国書刊行会編『百家随筆第二』、国書刊行会、一九一七年十月、一三三―一三四頁。
- [8]もとの記録は羽倉簡堂『清水筆語』(国文学研究資料館所蔵「IIIF Discovery in Japan 収録」https:// cultural.jp/item/iiifman-kotenseki-nijl-ac_biblio_200020264)にみる。
- [9]滝沢馬琴『兎園小説』、日本随筆大成編集部編『日本随筆大成』第二期第一巻、日本随筆大成刊行会: 隠語の類を集め二巻とし猜彙と名づく」との割注がある。 一九二八年四月、三三頁。また、山崎美成『三養雑記』「字謎」条にも「予かつて、和漢の字謎、 日本随筆大成編集部編『日本随筆大成』第二期第 離合詩、

凡例

校訂に使用した底本およびその略記は以下のとおりである。文字が著しく摩損したものや謎底が記されていない

四題以外はすべて収録した。

- ①【三台】『三台万用正宗』四三巻、万曆二七年(一五九九)福建建陽三台館・双峰堂余象斗刊本(坂出祥伸・ 小川陽一編『中国日用類書集成』、東京:汲古書院、二〇〇〇年一一月)
- 2 【燕台】『新鍥燕台校正天下通行文林聚宝万卷星羅』三九巻、万曆二八年(一六〇〇)江西撫州徐會瀛編輯 書目文献出版社、一九八八年) 福建建陽書林静観室詹聖謨刊本(北京図書館古籍出版編輯組編「北京図書館古籍珍本叢刊」第七六、
- 3 【万用】 『万用正宗不求人』 三五巻、万曆三七年(一六〇九)刊本(坂出祥伸·小川陽一編 『中国日用類書集成』、 東京:汲古書院、二〇〇三年五月―七月)
- 4 【万書】『万書淵海』三七巻、万暦三八年(一六一〇)刊本(坂出祥伸・小川陽一編『中国日用類書集成』、 東京:汲古書院、二〇〇一年二月―四月)
- (5) 【妙錦】『妙錦万宝全書』三八巻、万曆四〇年(一六一二)福建建陽安正堂劉双松刊本 『中国日用類書集成』、東京:汲古書院、二〇〇三年九月―二〇〇四年一〇月) (坂出祥伸・小川陽一
- 6 【竜頭】『鼎鍥竜頭一覧学海不求人』二二巻、刊行年と出処は不明、目録欠、闕巻九~一三(東京大学東洋文 化研究所仁井田文庫所蔵

訳である。

- 7 【新裁】『新刻鄴架新裁万宝全書』三四巻、万曆四二年(一六一四)刊本(東京大学東洋文化研究所仁井田文 庫所蔵
- 8 【五車】 『五車万宝全書』三四巻、万暦四二年(一六一四) 本(坂出祥伸・小川陽一編 『中国日用類書集成』、東京:汲古書院、二〇〇一年六月—一一月) 江西南昌徐企龍編輯、 福建建陽存仁堂・ 樹徳堂刊

【探精】『新刻艾先生天禄閣彙編探精便覧万宝全書』三七、崇禎元年(一六二八)刊本(東京大学東洋文化研

9

究所仁井田文庫所蔵

- 本書では、必要に応じて一部旧字体も使用するが、読みやすさを考慮して、引用文中の漢字は原則として新字体 謎底となる漢文の通釈は、おもに新釈漢文大系(明治書院)を参考にした。既訳のないものは筆者による現代語 数を推定し□□のように示した。 を使用した。Unicode 外の文字は、 推測した文字は「」に入れた。 原則として普通の活字に改めた。 文書の破損等で判読が困難な場合は、
- 傍線で異文の箇所を示した。底本の割注や明らかな誤字の訂正は () 語義を明確化するために注記・注釈を施す際に用いた。 で示した。〔〕 は訳者によるもので、
- 本来日用類書に収録されている燈謎は謎目 類書における燈謎の分類をもとに、謎目を適宜補った。 (謎の種目。 答えの範囲を示すもの) の表記がない。 本書では、 日用
- 本書は JSPS 科学研究費補助事業若手研究 21K12940「日本に伝存する漢字文義謎資料のデータベース化による 文化史的研究」(研究代表者:呉 修テツ)の成果の一部である。

[書句類]

詠張良 三台

留侯輔漢君 廷諍皆忠直 運籌 君王 | | | | | | | | | | | | | 帷幄中

仁恩布天下 徳愛播群工

為殺淮陰軰

投簪伴赤松

四書三句

諫行言聴 膏沢下於民 有故而去

《訳》 彼の仁恩は天下に行き渡り、 であり、君王はそれらをすべて喜んで聞き入れた。 方で戦略を立てた。 留侯 〔張良〕 朝廷で発する忠言はみな率直 は漢君 〔劉邦〕 徳愛は群臣に広がっ を補佐し、 後

て赤松子 〔神仙道術〕 の道に入った。

た。

淮陰輩

〔韓信〕を討伐したため、

官位を捨て

れ あ 謎底:臣下の諫は君に取り上げあれてよく行なわ まねく行き渡ったが、 進言はよく聴かれ、 わけがあってその臣下は その恩恵は人民に下り、

その国を去らねばならない。

註 謎底は『孟子・離婁章句下』による。

二句 第五·六句 (首聯) で「諫行」、第三・四句 (頸聯) で「膏沢下於民」、 (頷聯)

第七· で「言 第一・

八句 (尾聯) で 「有故而去」をそれぞれ連想した

ものである。

2

譏古 三台

梁恵王縻乱其民 臧文仲山節居蔡

四書二句

管夷吾亦樹塞門

楚陳

相

反背其師

不仁不智 無礼 無義

管夷吾 楚国と陳国はその盟約を破った の枡形を山の形に彫り、占い 訳》 梁恵王は民を疲弊させ 〔管仲〕も門の内側に屏を立て〔無礼〕、 の亀を貯めた〔不智〕。 (不仁)、 [無義]。 臧文仲は柱

3 嘆世 意の連想で解く。 三台

謎底は『孟子・公孫丑章句上』による。文

涓々逝水従東去 田 園阡陌皆枯槁 百姓惟懐死喪愁 相接相承不断頭

流連荒亡 四書一句

【燕台】【妙錦】【竜頭】【新裁】 同〉

《訳》細々とした川は東へ流れ 道もみな枯れ果て〔荒〕、民は死の絶望を抱える なく次から次へと流れていく [連]。 流 田地もあぜ 切れること

謎底:家に帰らないで、酒食や遊興にふける。 しかなかった [亡]。

念註》 句の文意から一文字ずつ連想し、あわせて四文字 謎底は『孟子・梁恵王章句下』による。

4

隠遁 三台

主若荒淫貪酒色 臣賢君聖楽時雍 献策長門入帝宮 解組帰来隠跡踪

四書二句

治則進 乱則退

を献じ朝廷に入る。君主が酒色にふけているなら 訳》 賢臣聖君による太平を享受するときは、

ば、 官吏を辞めて帰郷し姿を消す。

謎底:世が治まれば政治の道を進み、

世が乱れれ

ばその地位から退く。

註 謎底は『孟子・万章章句下』による。

の連想で解く。

の謎底にたどりつく形式の謎である。

16

策

憶古 三台

只因 箕子当年佐紂王

見紂無道自悲復

||屡諫遭囚獄 後来披髪自佯狂

事君数 斯辱矣

四 書二

旬

《訳》

箕子が紂王を補佐していたころ、

紂王

一の無

あり、

どうして僭越な行為になるの

か。

び諂

後に狂乱の姿となってしまった。 たことで牢獄に入れられたことがしばしばあり、 道さを目の当たりにし、 悲痛な念を抱い た。 諌め

軽んじ侮られることになる。

謎底:君に事えてあまりしつこくすると、

却って

註》 謎底は 『論語・里仁第四』による。

連想で解く。

6

臣職 出

三台

入禁闥輔昭宣

進止殿廷豈越班

7

嘆時事 個孤鴻帯箭来 三台

老翁病篤留些気

嘹々 唳々 過楼頭 中還説要修行②

安桀造謀声詍媚 四書二句 免冠待罪実為難

事君尽礼 人以為諂也

訳》 朝廷に出入りするのは王を補佐するためで

させられて実に困惑している。

ているなどあらぬ疑いをかけられ、

むりやり謝罪 媚

謎底:君に事えては臣たるものの礼を尽くすのは

当然のことなのに、世間の人は、

を得んがために、 媚び諂うのだという。

連想で解く。

註

謎底は

『論語

•

八侑第三』

による。

文意の

文意の

あれは君の寵愛

四書四句

鳥之将死 其鳴也哀

人之将死 其言也善

①【燕台】【妙錦】【竜頭】【新裁】【五車】無多氣

②【燕台】【妙錦】【竜頭】【新裁】【五車】【万用】 【万用】 【万書】 【探精】 無氣力

【万書】【探精】念釈消灾

飛んでいった。 て、痛ましく甲高い鳴き声をしながら楼閣の上を 《訳》矢に刺されている大きな鳥が一羽飛んでき 危篤な老人は幾ばくも無い命で、

謎底:鳥がまさに死にそうなとき、その鳴き声は 修行に出たいと言っている。

人がまさに死にそうなとき、その言葉は

善である。

連想で解く。 《註》謎底は『論語・泰伯第八』による。文意の

> 8 有感

捉得①魚児活溌鮮 三台 佳人不肯②下油煎

四書四句

聴得

厨中刀砧響

情願長斎繍仏前

見其生 不忍見其死

【燕台】【妙錦】【竜頭】【新裁】【五車】 聞其声 不忍食其肉

1

2 【燕台】嘱婦切莫、 【妙錦】【竜頭】【新裁】【五

車

献神前

③【燕台】【竜頭】【新裁】【五車】献仏前、【妙錦 嘱婦勿把

より、 影》 こうとしない。 新鮮な魚を獲ってきたが、佳人はそれを焼 刺繍された仏画の前で修行したほうがまし 厨の中で包丁とまな板の音を聞

謎底:生きた姿を実際に見ては、 それが死ぬのを である。

我視

蝶恋花詞

軍人農父共屯田 三台

器也周全糧也周全

言学徳恵已多年② 老也懷恩③少也懷恩③

足食足兵 民信之矣 四書二句

【万用】【万書】軍黎雜処号屯田 戈甲周全饋

1

餉周全

2 【万用】 【万書】 百姓中孚已有年

訳 ③ 万用 駐屯兵と農民がともに耕作し、 帰恩、【万書】思帰、【妙錦】 兵器も食料 懐恩

見るのは堪えられないものである。その声を聞い その肉を食べるに忍びないものである。

《註》 ては、

第四句は杜甫

「飲中八仙歌」の「蘇晋長斎

謎底:食を満足させ、 も厚く、老若問わずその恩を感謝している。 も充足している。統治者の言葉は信用できて、 軍備が充足し、人民に信義

徳

あらしめる。

《註》謎底は 『論語・

顔淵第十二』

による。

文意

の連想で解く。

梁恵王章句上』による。文意の連想で解く。

繍仏前」を取り入れたと思われる。

謎底は『孟子

10

譏世

三台

余丁数煩悩 煩悩 運限

煩悩上司来 煩悩夫子説不好 倒

四書四· 句

君子有三畏 畏天命 畏大人

畏聖人之言

《訳》 夫子の言葉をうまく解説できないこと。 とつに運命の不順、ふたつに高官の到来、三つに 軍役を免れた男が自らの煩悩を挙げる。 Ŋ

《註》謎底は『論語・季氏第十六』による。文意畏れ、大人を畏れ、聖人の言を畏れ敬う。迷底:君子に三つの畏れ敬うことがある。天命を

の連想で解く。

消世 三台

記得当初挽耍日 乾坤高掛断人扶黄昏瞎子阻長途 文公名説憶当初

四書序四句

為児嬉戲 天地懸隔晦盲否塞 熹自早歳

文公〔朱熹〕は昔を懐かしく話した。遊んでいた《訳》夕暮れのときに、盲者が道中で立ち往生する。

の支えなど要らない。

過去の日々を思い出す。

天は地上高く掲げ、

人間

謎底:世の中が乱れ暗く、物事が滞って進まない。

にかけ離れている。

烹

早年より。こどもの時の遊び。天と地のよう

章句序』『論語序説』『孟子序説』による。・《註》謎底の四句はそれぞれ『大学章句序』にえい書すている。

文意の

連想で解く。

12

対聯 三台

苑圃繁華瑞鶴仙羊棲止並巒峰秀麗霊芝喬樹長萌連

四書二句

草木生之 禽獣居之

生い茂っている。庭や園圃は生気が溢れており、《訳》山々の景色が美しく、霊芝と喬木は連綿と

吉兆となる鶴と羊がともに棲んでいる。

《註》謎底は『中庸』による。文意の連想で解く。謎底:草木がここに生え、鳥獣がここに棲む。

訳》

勉学に励め、勉学に励め、終始たゆまず励め。

14

瓜精

三台

連想で解く。

註

謎底は

『論語・学而第一』による。

しいことではないか。

瓜精 出好驚人 **拳鼎千斤若羽軽**

> 擾害良民常不静 出没之時不見形

四書一句

13

勧学

三台

書勤学

書勤学

自朝自暮莫暫離

心中自然多快足 功夫務要相継続

学而時習之 四書二句

不亦悦乎

怪力乱神

訳》

鼎も羽のように軽々と持ち上げた。民に害を及ぼ 瓜の妖怪が現れて驚異な力を示す。

千斤の

謎底:怪談、 武勇伝、 乱倫背徳のこと、鬼神霊験

しては騒動を起こす。出没する時は姿をくらます。

《註》 謎底は 『論語・述而第七』による。

そうして

底にたどりつく形式の謎である。 文意から一文字ずつ連想し、あわせて四文字の謎

謎底:学んだことをいつも繰り返し習うのは、

嬉

いれば、心の中は自ずと充足するのだ。 朝から晩まで一刻も勉強から離れるな。

文意の

15

開咏 三台

吸口気斂跡而無形 吹口気塞於天地間

四書序二句

放之則弥六合 卷之則退蔵於密

21

各句

o)

《訳》息を吐けば、天地の間を充満し、息を吸えば、

謎底:天運の循環。

罪の逃れようがない。

犯した人は身を隠す場所などない。

足跡が隠され、姿が見えなくなる。

しまえば秘密に退蔵される。

謎底:放てば六合(天地四方)にわたり、

巻いて

句ではない。

文意の連想で解く。

註

謎底は

『大学章句序』によるが、

連続の二

《註》謎底は『中庸章句』による。文意の連想で

17 万用

論孟仍還在 難識其中意

大学書句

則其書雖存 而知者鮮矣

《訳》『論語』『孟子』は今もあるが、【万書】〈同〉、【探精】前句のみ

その意味を

謎底:その書は伝存しているが、知る者は少ない。

理解するのは難しい。

《註》謎底は『大学章句序』による。文意の連想

で解く。

万用

蒼穹日月每周旋

犯法何処堪躱蔵

大学書句

天運循環 無所逃罪

【万書】【妙錦】【新裁】【探精】〈同〉

【竜頭】【新裁】蔵躱

《訳》蒼穹には太陽と月がつねに周旋する。

法を

時代まで伝わってきた。

万用 朝々換着好衣裳

大学書句

日々新

19

謎底:十目の見るところ

《註》謎底は『大学』による。文意の連想で解く。

《訳》この夜、五人とも見た。

謎底:前王忘れられず。

註

謎底は『大学』による。文意の連想で解く。

【万書】観

21 万用

両目俱盲難看物 双耳俱迎聾難見②声 18

万用

唐虞尭舜至今秋 大学書句

前王不忘

【万書】〈同〉

《訳》陶唐氏〔尭〕と有虞氏 [舜]

の聖名は今の

五人此夜共看見

大学書句 十目所視

20 万用

【万書】【探精】〈同〉

《訳》毎朝違う良い服を着る。

謎底:日々新たにする。

《註》謎底は『大学』による。文意の連想で解く。

万用

吃飯難弁甜与苦

大学書句

食而不知其味

24

万用

【万書】〈同〉

《訳》食事をしても甘味と苦味を判別できない。

大学書句

視而不見 听而不聞

【妙錦】【竜頭】【新裁】並

②【万書】聴、【探精】弁

《訳》両目とも視力を失い物が見えない。

両耳と

も聴力を失い音が聞こえない。

謎底:視れども見えず、聴けども聞こえず。

《註》謎底は『大学』による。文意の連想で解く。

【万書】【探精】〈同〉

《訳》墓の中にはどのような金銀財宝があるのか。

《註》謎底は『大学』による。文意の連想で解く。 謎底:亡人は宝とするものがない。

收動秋 糧百姓去

放済飢荒百姓②来

大学書句

謎底:食べてもその味を知らず。

《註》謎底は『大学』による。文意の連想で解く。

23

万用

大学書句

墳墓中有何金銀

亡人无以為宝

万用

今年産育這般多

生之者衆

大学書句

財聚則民散 財散則民聚

【万書】【妙錦】 【竜頭】【探精】 同

《訳》秋の食糧をすべて徴収すれば民は去り、 (1) 【新裁】銭 ②【新裁】子民

饉を救済すれば民は来る。

謎底:財聚まれば則ち民は離散する。財散すれば

即ち民は聚まる。

註 謎底は『大学』による。文意の連想で解く。

> 26 万用

註

謎底は『大学』による。文意の連想で解く。

謎底:これを生ずる者多し。

纔病一場尤未了①

又被賊盜劫銭②財

大学書句

飢

災害並至

【万書】〈同〉

①【妙錦】【竜頭】【新裁】好 2

《訳》病み上がりでまだ完全に治ってないのに、

盗賊に金を奪われた。

註》 謎底:災害並びに至る。 謎底は『大学』による。文意の連想で解く。

27 万用

世間若用孔夫子 定国安邦撫万民

【万書】 【探精】 〈同〉

《訳》今年生まれたものはこれほど多い。

25

新裁

去

万用

不拘大小皆拿起

巨細畢挙 中庸書句

【万書】 【探精】 〈同〉

《訳》大小問わずすべて取り上げる。

中庸書句

以天下之大聖 行天下之大事

《訳》世の中は孔子を重用すれば、 【万書】〈同〉 国は安定し万

謎底:天下の大聖をもって、天下の大事を行う。 民は護られるのであろう。

《註》謎底は『中庸章句序』による。文意の連想

で解く。

29

万用

で解く。

《註》謎底は

『中庸章句序』による。文意の連想

謎底:巨細ことごとく挙がる。

吃了蜜糖甜不尽

中庸書句

【万書】【探精】〈同〉 其味無窮

感じる。

《訳》蜜糖を食べたら口の中でいつまでも甘さを

謎底:その味窮まりなし。

《註》謎底は『中庸章句』による。文意の連想で

30 万用

26

ない。

文意の連想で解く。

万用

莫听 誹謗莫近人婦

中庸書句 去讒遠色

身被刀斬色如常 【万書】〈同〉、【探精】前句のみ 至死不変 中庸書句 死而不厭 瞑目幽明無怨心

謎底:死を辞さない。死ぬまで守り抜いて心をか 瞑って生死をさまよっても怨む心を持たない。 えない。 《訳》刀に斬られても顔色一つ変わらない。

《註》 謎底は『中庸』によるが、 連続の二句では

32

万用

目を

不説你做賊 只説你念経

中庸書句

隠悪而揚善

たが信心深く仏経を唱えたことばかり言いふら 《訳》あなたが盗賊だったことを言わずに、 探精】 謎面は前句のみ

あな

謎底: 悪いことを抑え、 善いことを取り上げて広

めた。

す。

【万書】〈同〉

《訳》誹謗中傷に耳を貸さず、他人の妻に近づか

謎底:讒言を退き女色を遠ざける。

註

謎底は『中庸』による。文意の連想で解く。

33 万用 註 謎底は 『中庸』による。文意の連想で解く。

世上惟有読書高

論語書句

学而第一

【万書】 【探精】 | 〈同〉

《訳》世の中において品格の最も高い行為は勉学 である。

念註》 謎底は論語第一 篇の見出しである。

34

万用

読書刻々下功夫

学而時習之 論語書句

范蠡に学んで舟に乗った。

《訳》山川を跋渉するような苦しい長旅を畏れ、

【万書】【妙錦】【竜頭】【探精】〈同〉

謎底:道の行われない世を避けるために、

小さな

いかだに乗って海上へでも出よう。 註 謎底は 『論語・公冶長第五』による。

【万書】〈同〉

《訳》寸時たりとも勉学を怠らない。

謎底:学んだことをいつも繰り返し習う。

連想で解く。

《註》謎底は

『論語・学而第一』による。

文意の

35

万用

畏程途之跋涉 学范蠡之泛舟

論語書句

道不行 乘桴浮於海

28

連想で解く。 《註》謎底は 《訳》一生懸命勉強して食事もせず、楽しく過ご を忘れる。

万用 の連想で解く。

36

努力攻書不吃飯 論語書句 歓々喜々無嗟嘆

発憤忘食 楽以忘憂

【万書】〈同〉、【探精】 前句のみ

謎底:発奮して食事を忘れ、 して嘆くこともない。 喜び楽しんで心配事

『論語・述而第七』による。文意の

38

万用

孝服満時件々帯

論語書句

【万書】〈同〉

37

万用

聴子説話皆歓喜

【万書】【探精】〈同〉

於吾言無所不悦

論語書句

《訳》あなたの言うことは、どれも聞いていて楽

しい。

謎底:私の言うところをすぐ理解してしまって喜

んでいるばかりだ。

註

謎底は 『論語・先進第十一』

による。

文意

万用

若有千斤力

何愁百万兵

勇者不惧 論語書句 《訳》忌明けになったら〔装身具を〕全部身につ

の連想で解く。

ける。

謎底:喪を服する以外の場合は 〔装身具を〕身に

つけた。

《註》謎底は 『論語・郷党第十』による。文意の

連想で解く。

40 万用

非因酔了昏々睡

論語書句

不為酒困

【万書】 〈同〉

《訳》ぐっすり眠っているのは酔ったからではな

連想で解く。

《註》謎底は『論語・子罕第九』による。文意の 謎底:酒を飲みすぎて乱れ苦しむことをしない。

41

百万の兵が

万用 口如唖人難説話

論語書句

『論語・憲問第十四』による。

文意

謎底は

註》

【万書】 【探精】 〈同〉

《訳》千斤を持ち上げる力があれば、

攻めてきても恐れる必要はない。

謎底:勇者は懼れることはない。

万用

位列朝班效諸葛鞠躬尽瘁

事君能致其身

論語書句

似不能言者

【万書】【探精】〈同〉

《訳》口のきけない人のように話すことは難しい。

註》 謎底:口もきき得ないようにみえた。 謎底は 『論語・郷党第十』による。 文意の

連想で解く。

連想で解く。

《註》謎底は『論語・学而第一』による。文意の

身沾塵沢慕陳雷以漆投膠

与朋友交言而有信

44 万用

刀戟森々一戦易梟総兵首

謎底:君に事えては一身を捧げてはげむ。

て奉公する。

《訳》官吏に列し、諸葛のように身命をなげうっ

【万書】 【探精】 〈同〉

43 万用

論語書句

【万書】【探精】〈同〉

《訳》体に付く塵と汗、 陳重と雷義のような膠漆

の交わりを敬慕する。

謎底:友だちと交わるに信義を重んじる。

連想で解く。

《註》謎底は『論語・学而第一』による。文意の

万用

註》

謎底は

『論語・子罕第九』

による。

文意の

とはできない。

連想で解く。

英雄凜々万金難動一人心

論語書句

匹夫不可奪志也 三軍可奪帥 也

> 殺儀設処請父母以同餐 家務忙時命児童而代力

論語書句

有事弟子服其労

有酒食先生饌

【万書】【妙錦】【探精】〈同〉

《訳》家事が忙しい時は子どもの力を借り、

宴会

を設けては両親を招待する。

謎底:骨の折れる仕事があれば、 若者が引き受け

がっていただく。

る。ご馳走があったら、先に生まれた者に召し上

註 謎底は 『論語・為政第二』 による。

文意の

できる。一人の男でも、その人の志を奪い取るこ 謎底:三軍も総大将を奪おうと思えば奪うことが 首される。英雄、

威風堂々して万金をあげてもそ

の心を動かすのが難しい。

《訳》刀戟、

森々として、

一戦交われば総帥が梟

万書 探精

都督 同

連想で解く。

46 万用

凜烈嵐光破睡必須熱水 炎蒸時候解煩惟用清泉

万用

県官昨夜賞花燈 若問人間愁苦事

到処頻聞鼓吹笙 人間愁苦不堪聞

孟子書句

夏日則飲水

論語書句

冬日則飲湯

【万書】【探精】〈同〉

ら清い泉水であり、 《訳》蒸し暑い日のいらいらを慰めるのは 激しい風雪の中で眠気を覚ま はもっぱ

すのは必ず熱湯を用いよう。

謎底: 夏の日には水を飲むが、 冬の日にはお湯を

飲む。

文の順番は逆である。文意の連想で解く。 《註》謎底は『孟子・告子章句上』によるが、 原

48 万用

因殺孩児起大軍

楽民之楽者 憂民之憂者 民亦楽其楽 民亦憂其憂

【万書】 【探精】 〈同〉

は聞くに堪えられない。 《訳》世の中の憂いや苦しみを問えば、 県官は昨夜飾り燈籠を見 その憂苦

謎底:民の憂いを憂う者は、民もまたその憂いを 物し、至るところから頻りに鼓楽が鳴っていた。

憂う。民の楽しみを楽しむ者は、民もまたその楽

しみを楽しむ。

《註》 謎底は『孟子・梁恵王章句下』によるが

原文の順番は逆である。文意の連想で解く。

孟子書句

為其殺是童子而征之

【万書】【探精】〈同〉

《訳》子どもを殺されたために大軍が招集された。

謎底:この子どもを殺したということのために、 〔湯王は葛伯を〕征伐した。

意の連想で解く。 《註》謎底は『孟子・滕文公章句下』による。文

右に曲がるときは直角を描くようである。

《註》謎底は『礼記・玉藻第十三』による。 の連想で解く。

文意

50 万用

近事淫多遠事攘

書経二句

内作色荒 外作禽荒

【万書】【探精】〈同〉

になり、遠いところでは強奪など悪事をはたらく。 《訳》身近な事に対してはだいたい節度なく放縦

謎底:家の中では女色に惑い、外に出ては狩猟に

ふける。

註

謎底は

『書経・五子之歌』による。

文意の

連想で解く。

万用

行囲左右合方円

49

礼記二 周旋中規 一旬 折旋中矩

【万書】 【探精】 〈同〉

謎底:身を翻すときは正円を描くようであり、左 《訳》歩くのも回るのも左も右も方円に合う。 連想で解く。

52

万用

上馬騄々歩難行

陟彼崔嵬 詩経二句 我馬旭尵

【万書】【探精】〈同〉

51

万用

天養丈夫地養婦 易経二句

乾道成男 坤道成女

【万書】 【探精】 〈同〉

《訳》天は漢を養い、地は婦人を養う。

謎底:乾道は男を成し、 坤道は女を成す。

註》 謎底は『易経・繋辞上伝』による。 文意の

> 註 謎底は『詩経・巻耳』による。

> > 文意の連想

で解く。

る。

《訳》すぐれた馬でも進みにくい。

謎底:彼の高き尾根に登れば、

我が馬は疲れ果て

[古文類]

上元 三台

聴他忠孝心懐妬

纔説淫奔到処伝

元夕遶街嬉 全憑灯火輝

焼尽銀蝋炬 住歩且1 回帰

小学二句

則 止

【妙錦】 【竜頭】 〈同〉

籠の光があるからである。 蝋燭が燃え尽きたら、 《訳》元宵節の夜に市街を回って遊べるのは、

燈

外で歩くのをやめて帰ろう。

謎底:夜は必ず燭をもっていく。

燭のない時は入

ることをやめる。

《註》謎底は『小学・明倫第二・夫婦之別』による。

文意の連想で解く。

譏世情 三台

54

撫掌堂中嬉笑語

休想昔日聖人言

夜行以燭 無燭即

聞人之悪揚之

聞人之善疾(嫉)之

惟楽戯語 小学四句

(談)

莫思古道

聖人の言葉を考えないで。 訳》 部屋の中で手を叩いて笑って話をし、 他人の忠誠と親孝行を 昔の

こっちで言いふらす。

聞いたら嫉妬し、

他人の放蕩についてはあっ

謎底:冗談に日を暮らして、古の道に思い

を致さ

ず、人の善行を聞いてはそねみ、 過悪を聞いては

宣伝する。

註 。謎底は 『小学・嘉言第五』による。

文意の

連想で解く。

自述

三台

鄰舎養児我也養 聡明魯鋭

般身

或作朝廷金紫客 古文四句 或作先駆後擁人

両家同 (各)

生子

賢愚同一

初

為公与相 一為馬前卒

かし、 訳 だの付き人となった。 も聡明でもなく愚かでもなく普通の子である。 隣の家も我が家も息子ができたが、 一人は朝廷に入って出世し、もう一人はた 両方と

謎底: しは、 になって出世し、 最初はみな同一である。一人は諸侯や宰相 両家それぞれ子が生まれたが、 一人は馬の前を進行する兵卒と 頭の良し悪

念註》 の四句ではない。 謎底は韓愈 「符読書城南」によるが、 文意の連想で解く。 連続

なった。

56 咏孔明

将終尚自禳天星 三台 曾何長沙識

陣堂々能制敵 屡出

屡捷奏佳

関

津

孫武兵書 一句

知己知彼 百戦百勝

立ち関門や渡し場を記憶することはないだろう。 八陣を駆使し堂々と敵を制し、 訳》 良将は結局自ずと強運を持ち、長く戦場に 出兵する度に勝利

をし、 吉報をもたらすのだ。

註》 連続の二句ではない。文意の連想で解く。 謎底は 『孫子兵法・謀攻第三』 によるが、

謎底:自分を知り相手を知れば、百戦百勝できる。

咏張良・進履 三台

57

圯橋春水漲長川 五日平明須早会 兵書一本贈英賢 進履逡巡聴所言

西江月

三台

堂上八音之楽①

連城趙璧価無窮 聴来難得相同 不值一文|何用②

千字文一句 楽殊貴賤

千字文一句

《訳》圯橋の下、長い川に春水が満ちあふれていた。 何遵約法

英賢は一冊の兵書を贈られた。 朝、必ずここで会おう」と。〔約束の日に行くと、〕 げると、〔老人に〕こう告げられた。「五日後の早

〔張良が老人の〕落ちた履を何度も取ってきて捧

謎底:蕭何は [高祖の] 約法の精神を遵守する。

《註》文意の連想で解く。

59

対聯

三台

鼓瑟吹笙①天子与庶民有異

立綱陳紀小人於君子不②同

千字文二句

楽殊貴賤 礼別尊卑

【燕台】【妙錦】【竜頭】〈同〉

 【万用】【万書】【探精】六律、 【新裁】

喧嘩

②【万用】【万書】【探精】須何用

るように聞こえる〔殊〕。連城の璧は値 《訳》堂上で奏でられる音楽は〔楽〕、どれも異な

である [賤]。 うはないが〔貴〕、

一文の値打ちもなけれ

ば

無用

0

つけよ

謎底:音楽は貴賤に従って形式が異なる。

《註》各句の文意から一文字ずつ連想し、 あ

て四文字の謎底にたどりつく。

41

わせ

1 探精 歓声楽地

2 【万用】 【万書】 【探精】 難

《訳》 瑟を弾き、笙を吹くこと、 天子と庶民は異

綱紀を正すこと、小人と君子は同じならず。

なる。

謎底:音楽は貴賤に従って形式が異なり、 礼は尊

《註》文意の連想で解く。 卑によって区別がある。

対聯 三台

傅岩賢士夢叶殷室高宗 山老叟挽正劉朝儲位

千文二旬

綺廻漢恵 説感武丁

<u>T</u> 先生 《訳》 は傅岩賢士 商山老叟 は劉漢の恵帝を復位させた。殷の高宗 〔東園公・綺里季・夏黄公・甪里 [傅説] に補佐される梦を見た。 武

した。

子の位にもどし、 謎底:綺里季

〔殷の高宗〕

に感応

[などの四賢人] 傅説は武丁

は、

漢の恵帝を太

《註》文意の連想で解く。

61 燕台

燈毬玩処響琵琶 雅唱謡詞遍里家

千字文一句

楼上伝杯人已酔

席中

-猶自唱

梅花

弦歌酒宴

【妙錦】【竜頭】【新裁】〈同〉

花落」をうたっている に酔っているが〔酒〕、席の中ではあいかわらず「梅 に充満した〔歌〕。上の階で杯を交わす人はすで 音が聞こえてくる〔弦〕。 《訳》丸燈籠が掲げられているところから琵琶の [宴]。 優雅な謡曲は近隣 の家々

開く。 謎底:琴を弾き、歌をうたって、 酒盛りし宴会を

《註》 各句の文意から一文字ずつ連想し、 あわせ

て四文字の謎底にたどりつく。

62

燕台

心々稼穑要耕耘 還願辛勤積穀因

ける。

《註》各句の文意から一文字ずつ連想し、 て四文字の謎底にたどりつく。 第四句は

糧

を

あわせ

同音字の「量」に置き換える。

63 燕台

節婦孀居苦 長天雁独飛 伝名天下知 屋破雨澆瀉

千字文一句

孤陋寡聞

【妙錦】【竜頭】【新裁】【五車】揚

が破れて雨水が落ちてきた 《訳》雁が一羽、広い空を飛んでいる く守る寡婦の生活は苦しいが 漏 [寡]、 (陋)]。 その名声は 孤。 操をかた 屋根

天下に伝わった 謎底:孤独で頑なな人、 [聞]。 見聞の狭い人

農具犁鋤不離身 一餐莫道来容易 千字文一句 器欲難量

【妙錦】 【竜頭】

《訳》農具・犂・鍬をつねに持ち歩き〔器〕、心を 【新裁】〈同〉

を得るのが容易いと言わないで〔難〕、 農作業に注ぎ耕作しようとする〔欲〕。

一日三食 願わくは

よく働いて穀物を積むことである〔量

(糧)]。

謎底: 自分の器量は他人には測り難いように心が

43

万用

朝廷列着武和文

府羅将相 千字文一句

【万書】【探精】〈同〉

謎底:役所には将軍や宰相が並ぶ。

《訳》朝廷には武官と文官が並んでいる。

《註》文意の連想で解く。

万用

65

乱臣十個致清平

千字文一句

【万書】〈同〉

同音字の「陋」に置き換える。

《註》各句の文意から一文字ずつ連想し、

あわせ

多士是寧

て四文字の謎底にたどりつく。第二句は「漏」を

【探精】不

《訳》国をよく治める賢臣が十人もいれば太平の

世が築かれる。

謎底:多くの人材がいて、天下はほんとうに安寧

となる。

《註》文意の連想で解く。「乱臣」には「政治に長

ずる賢臣」「臣道を乱す逆臣」の二つの語釈がある。

謎底の文意から、ここは「賢臣」を指すことがわ

明らかに「逆臣」の語釈を取っていて、文意は通っ かる。「致」を「不」に作る【探精】の異文は

ているが、謎底と合わなくなる。

66 万用

端居九五談天德 恭己无為四海寧

る。

67

万用

王十朋独守空房

銭玉蓮抱石投江

銭安撫為官清正 鄧尚書告老還郷

千字文一句 節義廉退

千字文二句

坐朝問道 垂拱平章

【万書】【探精】〈同〉

《訳》帝王の座にきちんと腰を据え、天徳を説く。

身をつつしみ、無為にして治まる天下は安寧であ

国を公明に治める。

謎底:朝廷にいて、

道を求める。

何もしないで、

《註》文意の連想で解く。

【万書】 【探精】 〈同〉

朋は再婚しなかった〔義〕。銭安撫は官吏として 《訳》銭玉蓮は石を抱えて入水したが

〔節〕、王十

に帰った〔退〕。

清廉であり〔廉〕、鄧尚書は年老いて退職し郷里

謎底:節操、

《註》各句の文意(すべて『荊釵記』という元末 道義、 清廉さ、 謙虚さ

明初 の戯曲による)から一文字ずつ連想し、あわ

せて四文字の謎底にたどりつく。

[書名類]

燕台

騒人情性載其書 書名

詩経

《訳》 詩文作者の気質はその書物に載っている。

《註》「騒」で「詩」、「書」で「経」を連想する。

70

燕台 道合乾坤蔵尺牘

易経

書名一

ている。

《訳》天地の道と理は尺牘

〔書簡〕

の中に隠され

《註》文意の連想で解く。

燕台 青黄白帝久同居

71

春秋

書名一

《訳》 く同居する。 青黄白帝 [道教における三官大帝]

が久し

《註》五行説において、「青」は春(木)の色、「黄

49

69

燕台 五帝三王出治図

書名一

書経

訳 三皇五帝の治国の書物。

《註》「図」で「書」を連想する。

「白」は秋(金)も色であるため。

72

燕台

家門彬々載聖賢 書名

礼記

訳 文人輩出の一族に聖賢の名が記されている。

解釈したが、「彬々有礼」という熟語があるように、 《註》ここの「彬々」は「文化的に発達する」と 「彬々」は「礼」を連想させる語である。「載」か

ら「記」を連想するので、あわせて「礼記」とな

る。

73

燕台

師生終日商量事 三十年来心始読書

不前不後一人愚② 好弁区々一丈夫

> 書名四 大学

中庸

論語

孟子

 (1) 【万用】【万書】【探精】 歳後

②【万用】【万書】年将半百返痴愚、

【 探 精 】

生来

半百方始□

《訳》三十歳にして勉強をはじめ〔「大」人になっ

てから「学」習〕、前後ともなく〔中〕ただの愚

か者〔平凡=庸〕である。先生と学生は一日中話

し合うが〔論語〕、取るに足らない論弁好き〔と

りとめがない=孟〕 の男〔子〕である。

《註》文意の連想で解く。

74

燕台

配物求吾(伍) 書名一 成美句

対類

50

想する。

燕台

群賢吟咏成篇帙 書名一

75

小書生把我来尋

書名一

蒙求

影 幼い学生が私を探しにきた。

《註》「幼い学生」で「蒙」、「探す」で「求」を連

77 燕台 照見胸中鏡一輪

書名一

明心宝鑑

鑑。

《訳》胸の中〔心〕を照らし現す〔明〕一枚の鏡

宝

【万用】月一輪、【万書】

一輪月

文意の連想で解く。

78 燕台

大兵端楷五音清

千家詩

燕台

《註》文意の連想で解く。

作り上げる。

影

並べる物を求め、 組み合わせて美しい句を

影 賢人たちの吟詠が篇帙を成す。

《註》文意の連想で解く。

燕台

七三四五将身喪 書名一

十九史

【万用】 【万書】 〈同〉

《訳》七三四五、身を亡ぼした。

ぼす」とは「死」であり、「史」の字音に近い。 《註》「七三四五」は合計すると「十九」、「身を亡

80

書名一 洪武正韻

燕台

書名一

室中無我事難成

居家必用

書〔正〕を書き、きれいに発音する〔五音清〕。

《訳》多くの兵〔盛大な軍勢=洪武〕

が端正な楷

《註》文意の連想で解く。

訳 私が家にいないと何事もなしえない。

《註》文意の連想で解く。

81

燕台

夜来如見家中信 書名一

夢書

註》 影 夜中に家からの手紙を見たようだ。

「夜中」で「夢」、「手紙」で「書」を連想す

る。

燕台

両個囲棋各不贏

書名

通書

影 二人は各々囲碁に勝利できなかった。

《註》「両方負ける」という意味の「同輸」

を同音

漢字に置き換えて「通書」と解く。

84

《註》文意の連想で解く。

燕台 兵家勝敗逞威争

棋勢

書名一

影

註 兵法家は勝敗を争う。

ちなんだ名称で囲碁の局面に名付ける習慣から 中国古代の囲碁書が歴史上で有名な戦役に

「棋勢」を連想する。

85

万用 睡中得信総成虚

書名

夢書

83

燕台

|無楷字

書名一

本草

万用 刑部法帖、 【万書】一部法帖

は楷書の字が一つもない〔「草」書〕。

《訳》習字の手本が一冊あって〔手「本」〕、中に

53

【万書】【探精】〈同〉

つも虚しく消える。《訳》眠りの中〔夢〕で得た手紙〔信「書」〕はい

《註》82と同じ着想である。

【大明律類】

憶別

三台

墮水失爹①音信無

自作紅粧篆字符

潜過②重門江口去③ 驀地 乗舟泛五湖

越渡関津 私船下海 沉溺公文 律語四条

私造印信

1 【万用】【万書】 児夫、【探精】 鬼天

2 【五車】【探精】出 【燕台】【万用】 【万書】【妙錦】【竜頭】 新裁

【五車】 【探精】 並江海 ③【燕台】【万用】【万書】 【妙錦】【竜頭】 【新裁】

④【燕台】【妙錦】【竜頭】【新裁】【五車】 【万用】 【万書】 偷過湖、 (探精) 偷過海 過五湖、

《訳》水に落ち、父を見失い、 い篆書の符を自ら作った。要塞を潜って大川の河 消息は絶った。 赤

へ行き、まっしぐらに舟に乗って各地を巡った。

為 偽造する行為、 民間の船が出海する行為 関門や渡し場を無断で通過する行 謎底:公文を水に投げ入れる行為、

公印を個人で

《註》文意の連想で解く。

対聯

87

三台

信陵君窃符救趙 馬幼常失陥街亭

律語二条

擅起官軍 主将不固守

【燕台】【妙錦】【竜頭】【新裁】【五車】 同

は街亭の戦いで惨敗した。 《訳》信陵君は割符を盗んで趙国を救った。 馬謖

しないこと

謎底:命令なしに官軍を起こすこと、

主将が固守

《註》文意の連想で解く。

燕台

閨 纔換弓鞋 門無伴重 解帯羅 一々閉 頻啓朱唇為甚么 孤眠偏厭雨声多

律語 脱漏戸口 条

(竜頭) (五車) 同

(妙錦) 新裁 懶

《訳》

やっと弓鞋

〔纏足婦人が履く靴〕を脱ぎ、

が 帯を解いた〔脱〕。一人で寝る夜はうるさい雨音 いやになる 漏。 寝室の中に伴侶がなく、 す

い唇を開くのはなぜだろう〔口〕。

べての扉を閉じている〔戸〕。それでも頻りに赤

謎底:戸籍に登録しないこと

て四文字の謎底にたどりつく。 《註》各句の文意から一文字ずつ連想し、 あわせ

89

燕台 大小老婆班次乱

問①得清白無仇②屈

自家夫配自家妻 不分長幼做夫妻

律語四条

妻妾失序 尊卑為婚

弁問 明 冤枉 同姓為婚

【妙錦】【竜頭】〈同〉

1 【新裁】【五車】考

②【万用】【万書】【探精】私

《訳》大小女房の順序が乱れ、

年齢や地位

|の分別

なく夫婦になった。清廉潔白で私怨はないと判明

謎底:正妻と妾の順序の乱れ、 した。同じ家の夫と妻を配偶者とする。 尊卑の別なく結婚

《註》文意の連想で解く。

すること、冤罪の弁明、

同姓者の結婚

燕台

撇了爹娘去做官 律語一 条

棄親之任

【万用】【万書】【妙錦】【竜頭】【新裁】【五車】【探

精】〈同

影 両親を捨てて官職につく。

《註》「之」には「おもむく」「の」と両方の意味 謎底:老親を扶養しないこと

るが、 を持つ。謎面の文意からは「おもむく」と連想す 謎底の「之」は接続語である。

92

万用 狗腸狗血祭世尊

律語一条

上 (褻) **涜神明**

【万書】〈同〉

91

燕台

雁度過関逓戦書

律語

条

飛報軍情

謎底:神を冒涜する行為 《訳》犬の腸と血で世尊を祭る。

《註》文意の連想で解く。

【万用】【万書】【妙錦】【竜頭】【新裁】【五車】【探

精 同

影 雁が関を飛び越え、宣戦布告を逓送する。

謎底:軍事情報を迅速に報告すること

底の形容詞「飛(速い)」とかけている。 謎面の文意から動詞「飛ぶ」を連想し、

謎

註

[官名類]

した。

93

万書 諸葛深謀迎魏師

《訳》孔子は瑟を弾いて顔回を憶った。

註

謎を解くには

「おもう」

0)

「思」

を同音字

の「司」に置き換える。

「司徒」は教育を司る官職

探精

兵備 官 名

【探精】 施

《訳》諸葛亮は謀略を深く考え、 魏の軍隊を迎撃

《註》文意の連想で解く。「兵備」 は 「兵備道」

たは「兵備官」の略。主に軍事・監察・裁判を司

る。

95

万書

東風解凍百花開 官名一

春坊

ま

《訳》東風が吹き、 探精】 同

大地は解凍され、

いろいろな

花が開いた。 《註》文意の連想で解く。 「春坊」

は皇太子の東宮

(春宮) 所属の官署。

94

万書

官 名

仲尼鼓瑟憶顔回

司徒

万書 相引王孫摘錦回

招討 官 名

【探精】〈同〉

討」は盗賊・匪賊など武装反乱者を討伐または帰 錦」から「奪標」、そして「討」へと連想する。 「招 《註》文意の連想で解く。「引」から「招」を、「摘 《訳》貴族子弟が連れ合って優勝を取って帰った。

【探精】攀

《訳》手を伸ばして色とりどりの花を摘んだ。 《註》文意の連想で解く。「探花」は科挙試験に三

番で合格した人。

98 万書

幾多枝葉出牆来

官名一

員外

【探精】〈同〉

《訳》たくさんの枝葉が壁の外まで伸ばしてきた。

の略。 字の「員」に置き換える。「員外」は 《註》文意から「園外」と読み取り、「園」を同音 定員のほかに設けた官である。 「員外郎

探花

97

万書

伸手高扳紅与紫

官名一

順させる武官。

64

万書

昼夜行走不留停

給事 官 名 99

万書 雷声霹靂天下聞

同 知

官 名

訳 はげ しい雷鳴が天下に轟く。

《註》文意の連想で解く。「同知」 は各官職の副職。

101

万書 服色翩々色様鮮

官名

妙錦

幇貼先生時訓導 還将経史詰文人 拜見官員論事情

参議 助教 博事 $\widehat{\pm}$

訳》 香燭を手配し君主の命を待ち、 官員に謁見

の略。 字の 註

天子のそばで雑事をする役である。

「給」に置き換える。「給事」

は「給事中」 「急」を同音

文意から「急事」と読み取り、

訳

昼夜歩いて留まらない。

繍衣

訳

服の様式が風流で色が鮮やかである。

《註》文意の連想で解く。

「繍衣」

は前漢の監察官

である。「繍衣使者」「繍衣御史」「繍衣直指」

な

102

どともいう。

安排香燭候君音

官名四

妙錦

《註》文意の連想で解く。「待詔」は朝廷の顧問と らに経史をもって文人に詰問する。 し事情を論じる。教師に補助し時々訓導する。 さ

は教授官に次ぐ官。「博士」は教授官。 して待機する技術官。「参議」は参謀官。 助教

発送を司る官職

「同知」は各官職の副職。

「経歴」は公文書の受領

聖経伝講相通習 頓守詩書不異途 学 正 官名四 教諭 郷学先由進国都 訓諸小子聴言辞 同知 経歴

竜頭 同

学官または地方学校の学官。「教諭」は各県の教官。 《註》文意の連想で解く。「学正」は国子監所属の 聖人の経伝を遍く習い、郷学を経て国都に入る。 《訳》一途に詩書を研鑽し、子どもを教え導く。

[地名類]

述懷 三台

霊禽蟠遶①半天飛 祖父在堂添福寿③

合家天佑得康寧② 舖

(鋪)兵路上拆公文

吉安府 重慶府 開封府

105

三台

嘆咏

霹靂船頭響

買紙做漿船

F.

用

乾河

水漲楫

堪行

声

征倭巨艦用梯登

州名四 雷州

高州

湖州

通州

鳳翔府 府名四

【万書】【探精】第一・四句のみ

①4【万書】【探精】霊鳥盤遶、

私拆公文字

② 【 竜 頭】 康佑得安寧

3

【燕台】【妙錦】禄

[鳳翔]、

霊禽は中天を回旋し

《訳》

護により健康と安寧を得

[重慶]。

〔吉安〕、

祖父は健在 一家は天の加

なった

通.

が増した

鋪兵は途中で公文書を開

福寿

封した [開封]。

註

府

の字を除いた地名の二文字

置き換える。

を連想する。第三句は

糊

を同音字の

「湖」に

《註》句ごとに、

州

の字を除いた地名の一文字

句ごとに、

を連想する。

106 思古

三台

洞中仙女遇劉晨

閔子辞官避水浜

水だった川に水が漲って船が通行できるように

紙を買って糊を作って船上で使う

糊

(湖)]。

渇

69

[高]。

倭寇を征伐するための巨艦は梯子で登る

《訳》雷が船の先頭に落ち、大きな音を立てた〔雷〕 。

栽柳門前思靖節 種桃城上説安仁

県名四

天台県 汶上県 彭沢県 河陽県

訳 子騫は官を辞め、 洞窟の中の仙女は劉晨に逢い〔天台山〕、 汶のほとりに隠棲した (汶上)。 閔

う〔彭沢県〕。 城の上に桃の木を上、安仁 「潘岳

門前に柳の木を植え、

靖節先生

〔陶淵明〕

をおも

の話をする [河陽県]。

地名を連想する。 《註》句ごとに、これらの故事や人物に関係する 劉晨の故事は『太平広記』、

子の故事は『史記』に見る。 「靖節先生」とも呼ばれ、彭沢県令を務めていた。 陶淵明は「五柳先生」

語 かけると、 潘岳は西晉時代の文人で、字は「安仁」。『世説新 には、 女性たちに投げ入れられた果物で車が 潘岳の容姿が美しいため、彼が車で出

っぱいになったという逸話が載っている。また、

『海録砕事』によると、 ていた頃、 県内に桃李を遍く植えさせたという。 彼が河陽県で県令を務め

107 咏古

東蕩西除覇業成 三台 全憑将士致昇平

忽然起造承天府 挙用賢才属大明

州名二県名二

武寧州

興国州 新建県 進賢県

【燕台】【妙錦】〈同〉、【竜頭】第二句なし

賢才を挙用し大明に隷属させる る〔武寧〕。忽然、承天府を造りはじめた ちの力があったからこそ世の中がよく治まってい 《訳》東西を征伐し覇業をなした [進賢]。 [興国]。 〔新建〕。 将士た

《註》句ごとに、「州」 一文字を連想する。 「県」の字を除いた地名の

《訳》父母が安寧であり高貴な身分を有する。 【探精】〈同〉

《註》「府」の字を除いた地名の二文字を連想する。

万書

天賜禎祥没是非

吉安府

府名一

天から吉兆を賜り、

訳 《註》「府」の字を除いた地名の二文字を連想する。 いざこざがない。 108

万書 父母安康身又貴

重慶府 府名一

110

万書 作福祝保祈求泰

府名一

影 幸福 保寧府 加護・平安を祈る。

《註》「府」の字を除いた地名の二文字を連想する。

111

万書

象牙板児造成船 三日三夜撑不到 造得船児不用銭

相公還在船上眠

貴州 饒州 池州 瑞州 州名四

探精 解板

《訳》象牙の板で船を造った のに金がかからなかった 〔饒〕。 [貴]。 三日三晩漕いで その船を造る

き換える。

もたどりつけない〔遅(池)〕。彼はまだ船の中で

置き換え、第四句は「睡」を類音字の「瑞」に置 を連想する。第三句は「遅」を同音字の「池」に

眠っている〔睡 《註》句ごとに、「州」の字を除いた地名の一文字 (瑞)]。

をもたらした〔詔(紹)安〕。

《註》句ごとに、「県」の字を除いた地名の二文字

置き換える。 を連想する。第四句は「詔」を類音字の「紹」に

万書 東方漸々日東昇 長亭人馬接公卿

三百文銭過一渡 県名四 聖旨招来百姓寧

建陽県 候官県 貴渓県 紹安県

探精 百万

渡りに銭三百文も払う〔貴渓〕。聖旨が民の安寧 《訳》東の空に日が徐々に昇り と馬で宿駅から公卿を迎える〔候官〕。一回の川 [漸(建)陽]、人

[人名類]

燕台

吾児之子有施為 縫線路中常憶母

教人終日倚門閭 鑿壁偷光夜読書

人名四

孫権

孔明 子思

呂望

【万書】【妙錦】【竜頭】【新裁】【五車】【探精】〈同〉

《訳》我が息子の子〔孫〕は出世した

[権]。

壁に

で勉学

穴を開けて〔孔〕隣家から漏れた光〔明〕 を励んだ。縫い目を見るとつねに母を思い出し〔子

思 《註》文意で漢字を連想し、 めている〔望〕。 日じゅう 屡 (呂) 門に寄りかかって眺 連想した漢字を組み 第四句は 屡

音字の「呂」に置き換える。

合わせて人名にたどりつく。

を同

114 燕台

傍流築室倚江湖 走避是非甘隠遁

> 蒼天感戴幸無虞 門遶青峦浪怕

拍

廬

伊川 人名四

山涛

陶潜

《訳》流れの近くに家を建て、江湖に寄りかかる〔依 【妙錦】【竜頭】【新裁】【五車】〈同〉

にぶつけられる〔濤〕。いざこざを避け〔逃 〔伊〕川〕。家門は青い山に囲まれ〔山〕、 (陶)]、

隠遁生活に甘んじる 〔潜〕。 蒼天に感激

《註》句ごとに文意から二文字ずつを連想し、 憂いのない人生に幸運を感じる〔安〕。

部同音字に置き換え、人名にたどりつく。

115 万用

鎖住皇帝門不開

廬は浪

万用

蜘蛛結網等虫来

人名

関羽

(万書) 【探精】 同

《訳》皇帝〔御 (羽)〕を閉じ込め、 門は開かない

関。

《註》文意から二文字を連想し、「御」を類音字の

羽

に置き換える。

117 万用

雪夜修書去取被 人名一

韓信

《訳》 雪が降る夜に

「布団を取りにいく」という

0)

《註》「雪が降る」から「寒」を読み取って同音字

「韓」に、「手紙」を「信」に置き換える。

旨の手紙を書いた。

118 万用

停嗔作喜春風面

顔回

人名

【万書】【探精】〈同〉

《訳》怒りを喜びに変え、春風のような表情になる。

張飛 人名一

【万書】 【探精】 〈同〉

《訳》クモは網を張って虫が飛んでくるのを待つ。

《註》文意から「張」と「飛」の二文字を読み取る。

76

万書

帆風送到蓬莱

樊噲 人名一 119

万用 痛惜孩児受苦辛

《註》文意の連想で解く。

人名一

【万書】 【探精】 | 〈同〉

《訳》子が受けた辛さと苦しさで心を痛める。

《註》「痛惜」から「憫 (閔)」を連想し、「孩児」

を「子」に置き換える。

121

に置き換える。

ら「快(はやい)」を読み取り、

同音字の「噲」

註

「帆」を類音字の「樊」に置き換え、

文意か

万書 終日哀々慕双親

人名一

【探精】〈同〉 子思

《訳》一日じゅう悲しそうに両親を恋しく思う。

《註》文意の連想で解く。

122 万書

睡熟逢児醒又驚

【探精】〈同〉

《訳》満帆の風で蓬莱まで送る。

人名

孟子

【探精】〈同〉

分もびっくりして目が覚めた。 《訳》眠りに落ちたら、子どもが起きたので、 自

に、「児」を「子」に置き換える。 《註》「眠り」から「夢」を連想して同音字の「孟

万書

三朝放在筐籃裏 懐孕婦人肚裏疼 孩児今夜必然生 四朝落地就能行

味の

人名四

子貢 一子夏 子張 子游

【探精】〈同〉

《訳》妊婦がお腹の痛みを感じたので〔子拱(貢)〕、

124

万書

世間 田地都占了 呼称一

霸王

わせると、孔子の弟子の名前にたどりつく。 意味の「張」を、第四句は「歩き回る」という意 第二句は「下(降りてくる)」を連想し、同音字 《註》全体的に赤子のことについて書いているの 張〕、四日目には地に足がついて歩ける〔子游〕。 の「夏」に置き換える。第三句は「置く」という で、「子」を読み取る。それから、句ごとに赤子 赤子は今晩中にきっと生まれるだろう〔子下 し上げる)」を連想し、類音字の「貢」に置き換え、 の状態を表す動詞を連想する。第一句は「拱(押 (夏)〕。生まれたら三日間は揺籃の中に寝かせ〔子 「游」を連想する。それぞれ「子」の字と合

【探精】〈同〉

想し、「世間すべての土地を有する」ことから「王」 《註》「奪う」という意味の「占」から「覇」を連 《訳》世間の土地をすべて奪った。

を連想する。

79

[詩・詞・曲類]

送行 三台

登途携手且停騰 擬

回程黄菊綻 謾把花言蜜語談

前三三与後三三

指帰期約定 在九月九 臨行時掇賺人的巧舌頭

西

廂記二句

訳 め く頃に帰ると予想し、前三三と後三三。 いたずらに甘い言葉を交わした。 旅に出るときに手を取り合って暫し馬を止 菊の花が咲

謎底: に帰ってくると約束した。 別れ際に言葉巧みにまくしたて、 九月九日

註》 による。文意の連想で解く。 謎底は元・王実甫『西廂記』 第四句 第五本第一折 の 前

る。ここでは三×三で「九」という数字を得る。 三三」は『碧巌録』第三十五 「無著見文殊」によ

126

憶別 別夫君已九秋 三台

雲山遥遠見無由

魚沉雁杳空懸望 何事忘家滞外州

香囊記一句 人迢々書未帰

雲山を隔てて会うすべがない。ようとして音信 訳》 夫君と別れてすでに九年経った。 遥かなる

を忘れて他郷に滞留しているのか。

なく、

ただ空しく待ちわびている。

謎底:人ははるか遠く、 註》 謎底は明・ 邵璨 『香囊記』 手紙はまだ来てい 第十九齣による。

ない。

文意の連想で解く。

閨怨

127

三台

海棠不比旧容光 蝉鬂無心対鏡粧

なにゆえに家

只因 張廠 敞 留京兆 致使何君往建康

朱顔非故 琵琶記四句 緑雲懶去梳

奈画眉人遠

傅粉郎去

てしまった。 兆に留まったがために、何君〔何晏〕 は建康に行っ い鬢髪を整理し化粧する気になれない。 訳》 紅顔は昔のような風采がない。 鏡 張敞 の前 が京 で黒

た。 謎底:容顔は昔のように若いままではなくなっ ん眉を描いてくれたあの人は遠くへ行ってしまっ 黒髪に櫛を通すのも気が進まない。 V か h 世

た。

《註》 字熟語でよく知られている。 職に至った前漢の人物で、「張敞画眉」という四 文意の連想で解く。 謎底 は 元・ 高 第三句 明 『琵琶記』 の張敞は、 彼が妻の眉を描くと 第九齣 京兆尹の官 による。

> 君」は は曹操の養子で、 国時代に「建業」 な色白肌の持ち主だった。 説新語 て遠い異郷だったわけである。 いう逸話は『漢書・張敞伝』にみる。 「傅粉何郎」こと何晏という人物で、 容止』 によると、 と呼ばれ、 魏の人なので、 彼は粉でも塗ったよう 建康は現在の南京、 呉の都だった。 建業は彼にとっ 第四句の「何 何晏 世 =

128

三台

旅懷

高堂雪①鬂歩難行② 十千嶺隘程途遠 荊室青春総妙年 鱗鴻絶跡没人伝

琵琶記三句

親衰老 妻女嬌

万里関山音信杳

【妙錦】〈同〉

1 【燕台】白 2 【燕台】 五車 難行歩

遊賞 騒人擱筆慢尋芳 たって音信が少ない。 謎底:親は老いて妻はまだ幼く、 は険しく遠く、手紙は跡を絶ち、 妻はまだ青春で妙年と言われる年頃。 文意の連想で解く。 註 謎底は元・高明 三台 明媚韶光賽洛陽 琵琶記』 第十六齣による。 届く人もいな 万里の関山で隔

漂ってきた。

訳》

親は白髪の高齢で歩くのもままならない。

万里の山道

意の連想で解く。 謎底:詩家が愛する清新な景色は新春にあ 註 謎底は唐・楊巨源 第三句の 『城東早春』 「胞次」は文意が取れ による。 ŋ̈́

文

ないため、試しに「眼波」とみて訳した。

130

月英赴約 三台

赴約海棠頻立 出門又怕惹閑情 久 去到梵宮月已沉② 酔魂不醒夢中人

千家詩一句

只恐夜深花睡去

【妙錦】【竜頭】〈同〉

【新裁】【五車】 非 2 【燕台】

1

《訳》 束に赴き、 がある。寺に着いた時にはすでに月が沈んだ。約 外に出るとまた人を惹きつけてしまう恐れ 海棠の近くに長く佇んだ。 酔って夢の

佳

致已收胞次裏

忽聞梅蕊暗舒香

千家詩一句

詩家清景在新春

《訳》 に収めたが、 しい春景色は洛陽にも勝る。 詩人は筆を擱いていたずらに遊覧する。 忽然と梅の蕾からの微かな香りが 美景はことごとく目

麗

中にいる人は目が覚めなかった。

謎底:ただ恐れるのは、 夜が深くなって花が眠り

込んだことだ。

《註》謎底は宋・蘇軾『海棠』による。 文意の連

想で解く。

閨情 三台

夢魂却到陽台 紅紫芬芳映 画楼 下 驚醒相思在両頭 幾欲登臨又帯愁

千家詩一句

春色悩人眠不得

【燕台】【妙錦】【竜頭】【新裁】【五車】〈同〉

登臨することを切に願うが愁色を帯びる。 《訳》色とりどりの花が華やかな楼に映えている。 夢の中

眠りから目が覚めてしまうので、 では何度もその楼台の下に行ったが、いつも急に 離れ離れになっ

た恋人のように想い合うしかない。

謎底 一:春の景色は人が眠れなくなるほど悩ませ

註 謎底は宋・王安石『夜直』による。

文意の

る。

連想で解く。

132

誤佳期 会郎曾許赴花陰 三台 誰想冤家別恋親

南楼雁唳声悲惨 無眠又是月三更

千家詩一句

有約不来過夜半

《訳》 に、 まさかあの人が浮気するなんて思いもよらな 恋人と花の下で逢引することを約束したの

今夜も眠れなくて夜半が過ぎた。

かった。南楼の上を飛ぶ雁は悲しく鳴いている。

謎底:約束した人は夜半が過ぎてもまだ来ない。

連想で解く。

念註》

謎底は宋・

趙師秀

『約客』

による。

文意の

謎底:

日が暮れて詩ができて、

天気はまた雪と

夜坐 三台

踈林黯淡值黄昏

頃刻睹観②雲漢外 復飄凍 剪燭 吟 雨 哦写就①文 |細③紛

日暮詩成天又雪

千家詩一句

燕台 【竜頭】成、【新裁】【五車】完

1

2 【妙錦】 【竜頭】【新裁】【五車】 挙目遠

睹

3

【燕台】【妙錦】【竜頭】【新裁】【五車】

落

時である。 訳》 疎らな木立の中は薄暗く、 蠟燭を切って詩を吟じ、文章をしたた ちょうど黄昏

めた。

しばし高い空を眺めると、

ふたたび凍った

雨粒がぱらぱらと落ちてきた。

なった。

註 謎底は宋 • 方岳

『雪梅』

による。

文意

の連

134

々

客情 三台

燈残漏尽滴壺銅

酩酊 玉山渾自倒 膏沢霏々下九重 東窓日覚太陽紅

千家詩 旬

夜深微 雨酔初醒

ば ずと横になった。 水滴 訳》 謎底:夜が更け、 い空から降ってきた。 が銅製の壺を打っている。 灯火は消えそうになり、 小雨が降り、 東の窓から赤い曙光が見えた。 美しい人は 漏刻は水が尽きて、 酔 雨が霏々として高 酩酊 7) から目覚めた 体が自

《註》謎底は唐・竇叔向『夏夜宿表兄話旧』による。

文意の連想で解く。

愛月 三台

皎々即々月一輪

忽然曙色東方白 謾把菱花手内擎 望中②端正在天心

千家詩一句 皓魄当空暁鏡昇

【妙錦】【竜頭】【新裁】【五車】〈同〉

《訳》清らかに輝く月が一輪。 【燕台】皓々 ②【燕台】月 眺めると、

ちょう

ようようと白くなりはじめ、 ど中天にかかっている。忽然と、曙色で東の空が 漫然と菱の花を手に

した。

註 謎底:明月が中天にかかり、暁に鏡が空に浮かぶ。 謎底は宋・李朴『中秋』 による。 文意の連

想で解く。

136

玩月 三台

天河如練界空間

黄鶴楼中鉄笛閑 輪宝月正団円

天運循環常不息

千家詩一句

天の川が絹のように空をかかっている。 銀漢無声転玉盤

《訳》

謎底:天の川が音もなく流れ、 となく循環し、 宝月が一輪、 円くなってい 玉製の盤のような

鶴楼の中に鉄の笛の音はしない。天運は止まるこ

美しい月が傾いていった。

謎底は宋・蘇軾『中秋月』 による。 文意の

註

連想で解く。

黄

【万用】【万書】

探精】

不久

137

寄友

折梅寄友到①江南 三台

別後纔経春未幾② 祝付殷勤切莫忘

千家詩二句 不期復見蕊③飄香

年好景君須記 今日花開又一年

【万用】【万書】 (探精) 過

3 【万用】【万書】【探精】 此葉

訳

梅の枝を折って江南の友に送り、切々と「私

らの春がわずか過ぎて、 のことを忘れないで」とことづけする。 花がもう一度咲く頃を待 別れ てか

たずに再会したい。

謎底 (, 今日、 :一年のうちの 花が咲いて、 i い景色をよく覚えてほ また一年経ったことを知

註 謎底の二句はそれぞれ、宋・蘇軾 『贈劉景文』

る。

138

で解く。

と唐・韋応物

『寄李儋元錫』による。

文意の連想

閨怨 三台

東京城裏暮春時 万紫千紅観馬蹄

巧女将来機上弄 何時経緯作緇衣

千家詩二句

洛陽三月春如錦 多少功夫織得成

ができるのか。 てきて機で織って、 の花を踏んで走っている。 訳》 暮春の頃、 東の都の中で、 いくら織れば出仕する時の服 器用な女性は花を取 馬が色とりどり

る。

その錦は、

どれほどの手間暇をかけて織りあ

春景色は錦のように絢

爛で あ

謎底:三月の洛陽、

げたのか。

註》 謎底は宋・ 劉克荘 『鶯梭』 による。 文意の

89

連想で解く。

傷春 三台

幽斎懶歩意沉吟

細把河図義理尋

徒爾未聞些個事 紅英飛尽又因循

千家詩二句

閑坐小窓読周易 不知春去幾多時

《訳》

静かな書斎の中をゆっくり歩き、

沈吟する

す。 ことに没頭する。河図に隠された義理を丹念に探 め、またもや花が知らずのうちに散ってしまった。 いささかも外の事に耳を傾けていなかったた

春がいつの間にか去ってしまった。

謎底:小さい窓辺に座って周易を読んでいたら、

《註》謎底は宋・程顥『遊月陂』による。文意の

連想で解く。

束しよう。

謎底:ただ良き時節になったらまた同伴すると約

を勧めたらまたあなたと飲む。

親戚に会いに行くのをお許しください。

念註》 謎底は宋・葉采 『暮春即事』

による。

文意

の連想で解く。

140 玩賞

· 西江月

三台

偶值好天良夜

休辜美景芳辰

許今夜会姻親 勧罷同郎再飲

千家詩一 旬

い景色と時節を裏切るわけにはいかない。 《訳》ちょうどめでたい日の良い夜だ。この美し 但逢佳節約重陪

141

燕台

荒年無米可充腸 容貌憔然苦没粮

親戚に酒 今夜は 燕台

近来已絶鱗鴻字 養子当年教子時 不見雲山望眼迷 単因名利赴京畿

琵琶記一句

142

謾説歳豊終有日 琵琶記一句 家私売尽只空房

忍餓担飢何

百了

【妙錦】【竜頭】【五車】〈同〉

《訳》

凶年であるため、

腹を満たす米がなく、

容

は豊年が来ると言っているが、 貌は憔悴し、食糧難に苦しむ。 くして空っぽな部屋しか残っていない。 家財道具は売り尽 いたずらにいつか

謎底:飢餓を我慢する日々はいつ終わるのか。

註 謎底は元・高明 『琵琶記』 第二十齣による。

文意の連想で解く。

143

燕台 屈数帰期 歳 (月纏

廂中已剩

寄来笺

粧台照睹全差別 憔悴 衰顔弗及先

指下余音不似前 琵琶記一句 孩児一去無音耗

妙錦 (竜頭) 同

五車 還思

《訳》子を養い、

子を教育した。子はただ名利の

なって、遥かなる地を見ることもできず、 ために京畿に赴いた。 近頃はすでに手紙も来なく 待ち望

む目が朦朧としている。

註

文意の連想で解く。

【妙錦】【竜頭】 同

え、 の顔がまったく違って見えた。 は届いた手紙が残っている。鏡台で覗いたら自分 ようになって、多くの月日が経った。 訳》 昔の容貌には到底及ばなくなっている。 指を折りながらあの人の帰る期日を数える すっかり憔悴し衰 部屋の中に

物にならない。 《註》謎底は元・高明『琵琶記』第二十二齣による。

謎底:指の下から流れ出る音は以前のものと比べ

用した。 文意の連想で解く。「音」という字の多義性を利 「音」を連想させ、 謎面の第二句では「たより」という意味 謎底では「音楽」の「音

紅娘私地携衾至 已是萱堂睡熟時

西廂記?

更深背母

【妙錦】【竜頭】 同

五車 抱

《訳》灯影は重く、 漏刻の水位は深い。

た月の光が淋しい夜を照らしている。 紅娘 緩々とし 気がこっ

落ちていた。

そり衾を抱えてきたその時、

《註》文意および謎面に書かれている 謎底:夜更けに母の目を盗んで。

「紅娘」

と

いう人物名から『西廂記』と推測できるが 謎底

四文字の出典は未詳。 文意の連想で解く。

燕台

に置き換えている。

灯影沉々漏転深 遅々月色夜凄其

145 万用

観中每迓蓬莱伴 賓館始留執正客

母親はすでに熟睡に

万用

種新篁巣鸞鳥

沼中金鯉聴春雷

増広賢文二句 庭栽棲鳳竹

池養化竜魚

《訳》道観でたびたび蓬莱からの友を迎え、 【万書】 【探精】 〈同〉

道院迎仙客 増広賢文二句

書堂隠相儒

にはじめて正道を守る客が泊まった。 賓館

わせる。 謎底:道院で仙人を迎え、書堂に宰相儒者を住ま

纂された格言集である。

《註》文意の連想で解く。

『増広賢文』

は明代に編

当今上位敬賢才

天子重英豪

147

万用

神童詩一句

《訳》当世の御上は賢才を敬重する。 【万書】 【探精】 同

謎底:天子が英豪を重んじる。

註

集めた児童向けの漢詩教本である。

文意の連想で解く。『神童詩』

は五言絶句を

万書 探精 〈同〉

> 訳》 門前に植えた初生の竹に鸞鳥が棲みつき、

謎底 金色の鯉は沼の中で春雷を聞く。 庭に鳳 凰 が棲む竹を植え、 池に竜に変化す

る魚を飼う。

《註》文意の連想で解く。

《訳》一挙に科挙試験に合格しその名は広く聞か

149

万用

挙登科各処聞 増広賢文一句

成名天下知

(万書) 【探精】〈同〉 万用

寒門未教習儒業

増広賢文一句 家無読書子

《訳》貧しい家は子に儒学を勉強させたことがな 【万書】 【探精】 〈同〉

謎底:家に勉学する子がいない。

かった。

《註》文意の連想で解く。

150

万用 読罷荘周臥小窓 故郷迢逓路茫々

千家詩一句

蝴蝶夢中家万里

故郷に遠く離れている。 《訳》荘子を読み終えて小さな窓辺に横になる。 【万書】【探精】〈同〉

謎底:胡蝶の夢の中、

家は遠き万里の彼方。

《註》文意の連想で解く。

謎底:名声を得て天下に知られる。 《註》文意の連想で解く。

94

万用

紅零乱落舞又加 又報児童捉柳花

千家詩一句

謝却海棠飛尽絮

151 子規不解孤眠客

千家詩

旬

啼血梢頭半夜長

杜鵑枝上月三更

万用

【万書】【探精】〈同〉

枝の先で血を吐くように鳴く長い夜の夜半。

《訳》ホトトギスが独りで寝る人の心を解らず、

《註》文意の連想で解く。「子規」と「杜鵑」はよ 謎底:ホトトギスが枝の先に立つ月夜の真夜中。

く知られているホトトギスの別名である。

【万書】 【探精】 〈同〉

《訳》赤い花びらが乱れ落ちて宙を舞っていると

思えば、子どもたちが柳の綿を追っているようだ。

んでいった。

謎底:カイドウの花は散り、

柳絮がことごとく飛

《註》文意の連想で解く。

153 万書

雲蔽蟾光勿上閣

増広賢文一句

無月不登楼

【探精】〈同〉

《訳》月の明かりが雲に覆われているときは楼閣

を登らないで。

謎底:月の光がなければ登楼しない。

文意の連想で解く。

妙錦

千家詩一句 郡邑看来猶故里 風花雪月総傷情 江関連隔幾千程 峻嶺崎嶇又阻行

水遠山長処々同

山道は険しく行く手を阻んでいる。道中の府県は《訳》河や関を次々と越え、何千里も隔たっている。

謎底:幾重の山と水を隔たっていても、景色は同つも痛む。

じ。

《註》文意の連想で解く。

96

【曲牌類】

閨怨

寄語飛瓊窈窕娘 三台

鮫鮹孤枕難成 夢 因何失約在西

玉簫声断去忙 (茫)

||牌名四

曲

伝言玉女 誤佳期

羅 帳 裏坐 憶秦娥

《訳》 独りで寝ても眠れず、 束を守らなかったのかと聞きたい。 ことばを美しい飛瓊に託 玉製の簫の音が途絶えて聞 Ļ なぜ西 手巾を握って 廂 の約

註》 捉え、文意の連想で解く。「飛瓊」 謎底の曲牌名 (調子の名称) は伝説の仙女 を短文として

こえなくなった。

の鮫人が織る薄い絹の意味であるが、 の名前である。 「鮫鮹」 はすなわち 「鮫綃 手巾を指す 伝説

語としてよく使われる。「秦娥」は歌い女の代名 詞であるが、ここでは恋人を指す。

156

三台

昭君怨

廂

慕想芳容難再会 金蓮款歩出宮難

簇擁征

馳出

漢

可憐紅粉去和蕃

曲牌名四

歩々嬌

惜奴嬌 憶多嬌 上馬嬌

【燕台】款、【妙錦】 移

殿から出るのも難しいのに、 《訳》纏足した足ではゆっくりとしか歩けず、 哀れなる美人は和蕃

う逢えないだろう。 のために送り出された。 彼女は兵隊に簇擁され漢関を 思い焦がれる芳容とは

《註》文意の連想で解く。

出た。

157

春思

三台

花落残紅満径① 鮮

鏡鸞塵掩頻々倚③ **聆看長安全各一天**

沉吟懊恨不成眠②

宮

宮情

三台

得待君王寵幸時

芙蓉如面柳如眉

曲牌名四

鋪地錦 怨相思 傍粧台 望遠行

【燕台】【妙錦】【竜頭】 【新裁】【五車】〈同〉

 (1) 【万用】【万書】野 ②【万用】【万書】抱恨未

③【万用】【万書】 匣掩空睜目 ④ 【万用】 【万書】

良人

成眠

いる。 訳》 覆 われ、 花が散り、 静かに口ずさみ悔恨で眠れない。 鏡台に寄りかかって、 小道は落ちた花びらに飾られて 今日もまた一日、 鏡は塵に

《註》文意の連想で解く。「耹」は字義未詳、 長安の方向を眺めていた。 試し

に「待ち望む」という意味の「盼」とみて訳した。

君情淚怯姿容瘦 無復当年美貌持

曲牌名二

惜奴嬌 泣顔! 口

から得る情は薄くなり、 ような顔に柳の葉のような眉だった。 訳》 君主の寵愛を受けていた頃は、 かつてのような美貌には 芙蓉 悲しくも君 の花の

もう戻れない。

《註》文意の連想で解く。

159

述古 三台

趙公園内遇鉏麑 唐主欣然接子儀

月下乘舟蘇子楽 呈祥胎鳥洞賓騎

焼夜香 曲牌名四

帰朝歓 夜行船 瑞鶴仙

万用 第四句なし

鉏麑は、

装束をきちんと身に着け、

朝廷に出仕す

【万用】 【万書】 唐王欣喜見子儀

宗訳》 で郭子儀を迎えた。 趙盾は庭で鉏麑に遭った。 蘇軾は月下で小舟を浮か 唐の皇帝 は喜ん ベ 7

《註》文意の連想で解く。趙盾は春秋時代晉の権 楽しんだ。 呂洞賓は瑞祥の仙鳥に乗った。 臣。

晉の霊公は彼と対立し、 彼を殺そうとした。 早朝に趙盾の屋敷に到着した 鉏麑という刺客を送って

事は ら頭を木に打ち付けて自殺してしまった。 る準備を済んだ趙盾の姿を見て、 『春秋左氏伝』に記されている。 刺殺を辞めて自 謎底の この故 焼

夜香」は「夜中にお香を点てて祈願する」 取れるため、転じて「夜中に起きている」という と読み

意味である。

郭子儀は安祿山を討伐し、 名将と知られている。 た話は彼の名文『赤壁賦』 蘇軾が小舟を浮かべて夜遊 都長安を奪回した唐の に見る。 呂洞賓は中

> 玉 「の代表的な仙人である。

160

趨朝

三台

翰林臣宰早朝 回

大会天下才能客 酕醄簇擁転家来 竜顔咫尺拜金鑾

曲牌名四

三学士 朝天子 集賢賓

酔扶帰

竜顔咫尺朝天子」に作る。

【万用】【万書】前の二句のみ、

影》

翰林、

臣佐、

宰相が早朝

0) 政 務

か

ら戻り、

能な人材を集め、宴会で深酔いして、 皇帝が乗る金鸞の車を咫尺から拝んだ。 周りに取り 天下の有

註 文意の連想で解く。 囲まれながら家に帰った。

「一二大臣朝内去

恩情

三台

金屋嬋娟影在東

情人有約総成空

自咏

簪前喜鵲噪声喧 三台

報道佳期在

目前

[喜] 見東籬黄菊綻 便邀佳客飲華筵

曲牌名四

好事近 金銭花 集賢賓

生査子

万書 第二句のみ

《訳》

簪の前でカササギが賑やかに鳴き、

め

でた

咲いているのを見れば、 会を開こう。 い日が近いことを知らせる。 嘉賓を招待し華やか 東の籬に黄色い菊が な宴

く声を表す字の「喳」を同音類形の「査」に置き 《註》文意の連想で解く。 第一句はカササギ の鳴

換え、「生査子」をカササギの別称とする。

163

対聯 三台

佳 幼女緣分眉惟喜麝蘭蔵笥篋 人紅襯臉不勝巵酒倚欄杆

記得少年騎竹馬 看々又是白頭翁

曲牌名四 誤佳期

錦堂月

要孩児

鮑老催

【燕台】【妙錦】

第

一句のみ

《訳》月が金屋を照らし、 影を東に落とす。恋人

【竜頭】【五車】〈同〉、【万書】

たちの約束はいつも叶わない。 とっくに白髪の翁となってい 記憶の中で竹馬に

乗っていた少年は、

第四句からは

老」 と

曲牌

の中でほぼ唯

「老」の字が入っている「鮑老催」にたどりつく。

燕台

别来懷恨積奴腸

曲牌名四

欲写衷情無剩紙

慵粧

蛾黛少張郎

納鳳挑鸞罷線筐

繫人心 綉停針 意不尽 懶画眉 曲牌名二

香柳娘 酔娘児

影》 小箱に収納される蘭麝 縁の良い眉をしている幼女は、 [香料] を好む。 竹で編んだ 顔を赤く

染められた佳人は、 酔いにまかせて欄干に寄りか

かる。

《註》第一句は「幼女」から「娘」、「眉」から「柳」、 蘭麝 から「香」を連想する。 第二句は文意か

ら「酔」、「佳人」から「娘児」を連想する。

165

万用 五月牆頭

曲牌名 何日開

石榴花

【万書】〈同〉

註 《訳》五月の壁の上、 曲牌名に入っている花のうち、 花は何日に咲くのか。 花期が

五月

となるのは石榴(ザクロ)のみである。

訳》 【妙錦】 【竜頭】 【五車】 〈同〉 離れてから心の中に怨嗟が溜まってきた。

刺繡していた鳳凰と鸞鳥を途中でやめた。

描く気になれないのは、 書こうとしたが紙が残っていない。

あなたがそばにいないか

化粧して眉

心中を

らだ。

《註》文意の連想で解く。

不怕寒風瑞雪来 ||万用

臘月梅名一

《註》文意の連想で解く。

【万書】〈同〉

[骨牌名類]

く知られている。

168

万用

項劉立国交兵策馬戦無休

骨牌名

167

万用

季子求名身掛亞竜泉遊未転 骨牌名

 (1) 【万書】帯 ②【万書】【探精】

蘇秦佩剣

いまだ帰ってこない。

《訳》季子は名を求め、竜泉剣を身に掛けて遊説し、

魏国

合わせで作られた役の名称である。「季子」が謎 《註》文意の連想で解く。骨牌名とは骨牌の組み

秦列伝第九』の「見季子位高金多也」の一文でよ 底の蘇秦のことを指すことばとして、『史記・蘇

(万書) 探精】 〈同〉 項羽劉邦

《訳》項羽と劉邦は国をたて、兵を交わり、

馬を

駆けさせ、際限なく戦を繰り広げた。

《註》16番と合わせて対聯になる。

169

万用 孟冬和暖渾如青帝当権

骨牌名一

十月応小陽春

《訳》孟冬の時候、

まるで青帝が権力を握ってい

(万書) 【探精】

合同

るように暖かい。

《註》「孟冬」は冬の最初の月、 旧暦の十月を指す

楚漢争鋒

万用

北斗光輝照耀上方斬馬

骨牌名

七星剣

【万書】【探精】〈同〉

《訳》北斗の光に照らされ、上方で馬を斬る。

ともいう皇帝専用の宝剣であり、 《註》「上方」は「上方剣」の略。 または「尚方剣 尚方署により特

妙錦

製されたもの。

隠々梵王宮裏催 推窓紅 日尚 徘徊

骨牌名

開奩鉛粉軽施設

頻把胭脂頬上堆

ことば。「青帝」は春を司る天帝である。

鐘旭抹額

竜頭 〈同〉

《訳》寺の召集の音がかすかに聞こえる〔鐘〕。

窓

を推して外を見たら日がまだ赤い〔旭〕。奩〔化

粧用具の入れ物〕を開いて軽く白粉をして

[抹]、

頻りに臙脂を頬の上に載せる〔額〕。

《註》各句の文意から一文字ずつ連想し、

て四文字の謎底にたどりつく形式の謎である。 あわ

108

せ

[字謎類]

四口自相依。」

172

拆字

群羊失散竟何之 三台

個人児頭頂板 後学無文不見系 一三四口自相親

君子不器

四書一

旬

竟何之、孫学無文不見系。一個人児頭頂板、 【燕台】【妙錦】【竜頭】【新裁】【五車】「群羊拆散

のずと寄り添う〔4つの口+工=器(器)〕。 は頭に板を載せ〔个+一=不〕、一工と四口がお 文もなく繫束されず〔斈(学)-文=子〕。一人 《訳》羊の群れを見失い〔群ー羊=君〕、後学は一

念註》 謎底は『論語・為政第二』

的な手法を使用しているため、

四書類ではなく字

字字形の分解・組み合わせ)」という字謎の典型 謎底:君子は器ならず。 による。「離合 (漢

> 咏項羽 三台

謎類に分類されている。

173

項羽当年志気雄 八千子弟今何在 自刎烏江始見空 誰知戦敗総無工

項字拆一字

【妙錦】〈同〉

虚しさが分かった。 今どこにいるのか。 《訳》往年の項羽は雄大な心意気を持っていた。 しかし戦に敗れてすべてを失った。八千の兵士は 烏江で自刎してはじめてその

つまり、 第一句の「項」の字から、第二句から第 め、「取り除く」という解き方のヒントとなる。

はどれも「なくなる」という意味が読み取れるた

《註》後ろの三句の「無」「何在 (どこにいる) 」「空」

り除くと、謎底の「一」の字にたどりつく。 四句の「工」「八」「自」という三つのパーツを取

烏江自刎 三台

項羽烏江失勝時 抜山力尽霸図虚

八千兵散無踪影 勝字拆夫字 **泣対虞姬月下離**

夫

ほどの力が尽きて、その覇図は虚となった。八千 《訳》項羽が烏江で勝利を失ったとき、 山を抜く

決別するしかなかった。 の兵士は跡形もなく散り、 涙を流し月下で虞姫と

《註》「尽」「散」「離」=取り除く。 の字から「力」「八」「月」を取り除くと、 第一句 謎底の

0 勝

夫」の字にたどりつく。

176

憶古 三台

垓下戦敗

175

殺気騰々戦不停 三台 八千兵散楚歌声

渡頭拋却烏騅馬

明月営中不見形

騰字拆夫字

夫

【妙錦】〈同〉

《訳》殺気がみなぎって戦いつづける。 八千の兵

を捨て、明月の夜に軍営から姿を消した。 士が散って楚歌が聞こえてくる。 渡し口で烏騅馬

《註》「散」「拋却」「不見形」=取り除く。 の「騰」の字から「八」「馬」「月」を取り除くと、 第一句

謎底の「夫」の字にたどりつく。

辺邦寧靖干戈息 項羽当初苦戰時 十畝田児足食衣 休将二口把心疑

を「たす」と理解し、「十」と「田」を足せば、[0) 田十」となる。

《註》「散」「息」=取り除く。 決別するしかなかった。 字から二つの「口」と「戈」を取り除くと、 ほどの力が尽きて、その覇図は虚となった。八千 の兵士は跡形もなく散り、 「卑」の異体字にたどりつく。第四句の「足 項羽が烏江で勝利を失ったとき、 涙を流し月下で虞姫と 第一 旬の 山を抜く 戰 謎底

> ない。 訳 朱門は山野の霧に閉ざされ、 仙人が住む山の麓で憧れの人と出会った。 押しても開

戰字拆[[[]]田十]字

犢

生の術を買って帰った。

霊丹を得たいと思うが執着する気にはなれず、長

無心」は、「志」から「心」を取り除くこと(「士」 が残る)。第二句はとくに仕掛けなし。第三句の「志 から 《註》 と合わせると、 の字が残る)。最後に、第四句の「買」を「牛」「士」 第一句の「搬未開」はすなわち、「朱」 「撇(はらい)」を取り除くこと(「牛」 謎底の 「犢」となる。 の字 の字

177

偶遇

三台

178 偶題 三台

準擬今春楽事濃 三分人事相羈絆 立国咸陽一木中 誰知此日竟成空

春字拆泰

(秦) 字

朱字拆犢字

霊丹有志無心恋 嵐鎖朱門撇未開

買得長生術数回

仙山

々下遇多才

113

思情

三台

共約他時来普[救] 正想鶯々又一空

竹林之下語従容 偶然月下得重逢

正字拆肯字

秦

肯

割が人間関係のしがらみによるもので、一本の木 が、この日においてすべてが水の泡となった。三 で国を立て咸陽を都にするようなことである。 訳》 この春に楽事が成せるだろうと思っていた

原本は「泰」に作るが、誤植であろう。第四句の を「
奏」の下に立てると、「
秦」にたどりつく。 ると、それぞれ「
夷」となる。
第四句の「一」「木」 取り除き、第三句の「三」と「人」を組み合わせ 《註》第一句の「春」の字から第二句の「日」を

「立国咸陽」からも謎底は「秦」と推測される。

瀬し、 然にも月夜に再会した。 訳 鶯々に会おうと思って会えなかったが、偶 竹林の下でゆっくり話すという約束を交わ また別の日に普救寺で逢

すと、 した。 「止」の字を得る。その下に第二句の「月」を足 《註》第一句の「正」の字から「一」を取り除き、 謎底の「肯」となる。「肯」には「承諾

180

花影

三台

剛被太陽收拾去 時刻移陰一漏催 却教明月送将来 十分春色下瑶台

時字拆肘字

肘

という意味があるため、第三句と第四句の文意と

つながる。

待漏 を得ること。「寸」の字を第四句の の字から「一」「十」「日(太陽)」を取り除いて「寸」 《註》「漏」「下」「収拾」=取り除く。すなわち、「時 今度は明月によって送られてきた。 賑やかな春景色は神仙の住むところから降ろされ 合わせると、 太陽とともに拾い上げられたかと思ったら 三台 謎底の「肘」となる。 露珠点々滴闌杆 「月」と組み

> 欄干に落ちる。官を退けば故郷を思い、人生には 《訳》 星がまばらな遅い夜中、結露がぽつぽつと

忠と孝が両全しがたい。

(妙錦) 訳》

同

時が移り変わり、

漏刻の水が減っていく。

三句の「一」を取り除き、「―」を得る。 《註》第一句の「斗」から第二句の「点々」と第 の「人」と組み合わせると、謎底の「个」となる。

第四句

182 嘆儒

三台

才高道大一鴻儒 忽然一朝雲霧起 管教士女下蓮除 争奈無人肯薦嘘

儒字拆耍字

耍

然とその障害がなくなれば、 ことになぜか彼を推挙する人がい する女性は現れるだろう。 才能が高く学問が博大な儒者だが、 きっと彼に嫁ごうと ない。 惜 つか忽

115

181

星斗踈明更漏残

退金門思故苑

人生忠孝両全難

斗字拆个字

念註》 第三句の「雲霧」を意味する雨冠を取り除き、第 四句の「女」を添えると、 ため、ここでは類音字の の「人(亻)」を取り除いて「需」を得る。そして、 として訳してみた。 原本第四句の「蓮除」では文意が取れない 。まず、 **盒**厨 儒 謎底の「耍」にたどり の字から第二句 (嫁入り道具)」

が吹いてくるのを感じた。

た。

今日から灼熱の猛暑が終わり、

漸くまた西風

《註》 句の 「木」の頭に第四句の「西」を載せると、謎底の「栗_ 撇 第一句の「秋」から第二句の (はらい)」を取り除けば「木」が残る。 「火」と第三

自述

三台

にたどりつく。

184

生来衣食不求人 五湖四海皆兄弟 万事須教忖度行 素行検点好持身

字四

勤謹和緩

どこの人とも兄弟のように接し〔和〕、何事も必 ず十分考えてから行う〔緩〕。 素行に気をつけ慎み、よく自分を律している〔謹〕。 《訳》生まれながらにして衣食を人に頼らず (勤)、

新秋 三台

従今撇却炎蒸気 露竹残蝉昨夜秋 漸覚西風又到頭 長空大火適西流

秋字拆栗字

栗

《訳》 空を見れば、 を見て、昨晩から秋になったことを知る。 露が落ちている竹に秋の蝉が鳴いているの 大火(心宿)がちょうど西へと移っ 広い夜

君徳 三台

同僚

との

間を調

和し平和を保つこと。「緩」

は は

と。

こと。

謹

は、身の持ち方を慎むこと。

和

は官吏の四字の訓

誠。

勤

は、

職務に精励する 「勤謹

て謎底の四字熟語と解く謎である。

句ごとの文意から一文字を連想し、

合わせ 和

緩

仕事を急が

ず、

静

か

に

やってゆくこと。『小学

五穀豊登托上蒼 朝中文武列成行

領受明君恩寵愛 字四 天官賜福 願教有徳效陶唐

影 け 官武官が行列となす 賜、 五穀豊穣は天からの恵み 徳ある皇帝が陶唐氏 官。 明君からの恩寵を受 天。 〔理想的な天子像 朝廷では文

である〔月〕。

である尭〕に倣うよう願う

民間信仰、 《註》句ごとの文意から一文字を連想し、 て謎底の四字熟語と解く。「天官賜福」 福神とされる「天官」 から福を賜るこ は 古代 合わ

0 せ

186

閨情

三台

外篇・善行』による。

夜静無端繍 水肌王骨 [并』]寒素 戸 開 起看嬌艷逞姿容 疑是嫦娥宮裏来

字四

風花雪月

楚で 花。 訳 (風)。 [雪]、まるで嫦娥の宮殿から来た者のよう 静かな夜に、 水のような肌に抜きん出る骨、 起きて、 美しさを競う艶やかな花々を見る 寝室の門がわけもなく開 冷たくて清 ζì た

《註》句ごとの文意から一文字を連想し、 合わせ

て謎底の四字熟語と解く。

女徳・西江月 三台

拈針挑繍用心機 説話務要誠実 為人作事仁慈 対鏡梳粧華麗

字四

言行 (徳) 工容

慈に 《訳》 見て綺麗に身じまいをする〔容〕。 ことばは必ず誠実に〔言〕。行いと人柄は仁 [徳]。針仕事と刺繡には工夫を [工]。

《註》句ごとの文意から一文字を連想し、 て謎底の四字熟語と解く。「言(恭しいことば)」「徳 合わせ

四行。『礼記・昏義』による。 会において婦人が修めなければならないとされた 、婦徳)」「工(裁縫)」「容(良い容貌)」は封建社

188

懐古 西江月 三台

石崇珍宝敵国 王[公]帝戚権臣

范丹昔日 [甑]生塵 晏

字四

富貴貧賎

家の親族、 《訳》石崇の財産は国に匹敵する〔富〕。王公、王 権臣 [貴]。 范冉は昔、 甑に塵を積

らせていた〔貧〕。

《註》石崇は西晉の富豪。范冉

(范丹とも)は後

語でよく知られている。 漢の賢士、彼の清貧生活は が多いため、人物の特定が出来なかった。 第四句は判読できない字 「甑塵釜魚」の四字熟

189 述古

三台

琴鶴相随称趙忭 囲城自尽斉王燭 抱石投江銭玉 蓮 不[帝]秦君魯仲連

€

懐古

三台

成湯解網施禽獣

雲長封庫却黄金

交接陳蕃魯

下榻

七擒

孟獲孔明心

字四

仁義礼智

忠孝[廉] 節 字四

訳 城が囲まれ、 斉の王燭は自尽した〔忠〕。

行っ 仲連は秦王に仕えなかった ても琴と鶴を連れて いた [孝]。 [廉]。 趙忭はどこへ 銭玉蓮は石

を抱えて河に身を投げた 節。

念註》

王燭・魯仲連の故事は

『史記・田単伝』

『史

記・ 史・趙忭伝』、銭玉蓮の話は戯曲 魯仲連鄒陽列伝』 にみる。 趙忭の故事は 『荊釵記』による。 宗宋

191

合字

三台

字一

休使他人来問卦(卜)

不行不坐不成眠(立) 非干己事莫相連(目) 有夜相虧 有夜

| 円 (月)

龍

雲長 陳蕃は客をもてなすために腰掛けを差し出 《訳》成湯は網を解いて禽獣に恩恵を施した〔仁〕。 関羽 は庫を封じ黄金を拒絶した 〔義〕。 した

めた 智]。

礼。

孔明

[諸葛亮]

は七度孟獲を捕獲し心を攻

註 句ごとの文意から一文字を連想し、

て謎底の四字熟語と解く。成湯が網を解く故事 合わ

は せ

『史記・殷本紀』、 関羽が庫を封じる故事は

志-蜀書六・関張馬黄趙伝』、陳蕃下榻の故事は『後

漢書・陳蕃伝』、孔明と孟獲の故事は

『三国志演義

閨情

三台

惜花間紅日西墜

倚闌杆東君去也

悶無心懶傍粧台 閉朱戸不見多才

字一 門

訳 関わるな(目)。 も来させるな(卜)。自分と関係のないことには ば丸くなる夜もある(月)。人が占いを要求して 歩かず座らず眠らず(立)、欠ける夜もあれ

確には「自」の右側の縦画を無くす形 わせて謎底の漢字と解く。第四句の「目」

《註》句ごとの文意から一文字を連想し、 は、 正 組み合

> 訳》 うちに日は沈み、気怠くて悶々と鏡台に寄りか 閃時人不見、懨々愁悶自無心。」 され、恋人と逢えない。 紅日が花間に沈むのを惜しみ、 欄干に寄りかかっている 朱門が閉ざ

《註》句ごとに同じ漢字を解く謎である。 かった。 墜」「不

ら「日」を、「閉」から「才」を、「闌」から「東 見」「去」「無」=取り除く。すなわち、「間」か

の字となる。

を、「悶」から「心」を取り除けば、それぞれ

193

燕台

明朝分别去 不必憂愁涙 寬心自在嬉 有日会佳期

字四

悲歓離合

(燕台) 【妙錦】【竜頭】〈同〉

万用 「花間紅日已沉西、 閉戸才郎没処尋、

撲々

門

竜頭 日

自在に遊んで〔歓〕。 《訳》憂愁な涙を流す必要はない

[悲]。

安心して [離]、ま

明日には別れるが

【妙錦】【新裁】【五車】〈同〉

た良い日に会えるさ〔合〕。

《註》句ごとの文意から一文字を連想し、

て謎底の四字熟語と解く。

燕台

九横并六直 諸人皆不識

去問朱文公 [也]猜了三日

字一

晶

【万用】【万書】【妙錦】【竜頭】【探精】「九横六直

諸人不識。問朱文公、也猜三日。」

《訳》九本の横画と六本の縦画がある。 これは何

解くのに三日かかった。

の字なのか、

誰もしらない。あの朱文公

〔朱熹〕

註 に聞いても、 第一句 ・第四句で字形に関するヒントを出

している。

195

燕台

合わせ

若作杏呆猜 木了又一口 不是真秀才 非杏又非呆

字一

極

【万用】 【万書】 【妙錦】 【探精】〈同〉

(竜頭)字

《訳》木がおわるとまた口が一つ。この字は杏で もなければ呆でもない。 もし杏や呆と解いたら、

まことの秀才ではない。

《註》 第一句の五文字をすべて組み合わせれば謎

燕台

女子同眠 人能扁担 月去耳辺 両又斉肩

字四

好双大脚

(妙錦) 拖

【竜頭】〈同〉

側に行った〔月+去+単耳旁(ふしづくり)=脚〕。 べている〔双〕。人は天秤棒を担ぐ〔大〕。 月は耳の 《訳》女子がともに寝ていて〔好〕、両人は又肩を並

《註》句ごとに離合法で一文字を解き、合わせて

謎底の四字熟語と解く。「好双大脚」は明太祖の

皇后を揶揄する俗語。

底の「極」の字になる。

197 万用 宇宙茫々]_①気清

由来万物尽生成 四海無争。賀太平

字四

黎民鼓舞帰王化

天地人和

【万書】〈同〉

 【探精】浩 ② 【探精】 謳歌

《訳》宇宙は茫々として気が清く〔天〕、万物がそ

れに由来し生成される〔地〕。民が喜び勇んで天

子の教化に帰し〔人〕、天下に争いごとがなく太

《註》句ごとの文意から一文字を連想し、合わせ 平を祝う [和]。

て謎底の四字熟語と解く。

198 万用

三人同日去観花 百友相交共一家 ある。

仇 (愁) 恨無心尤不足 夕陽橋下一双瓜

字四 春夏秋冬

【万書】 〈同〉

【探精】に二回収録。一 回目は「三人同行去観花、

百友元来共一家、禾火二人相対坐、夕陽橋下一双

来為作家、禾火去心尤不足、夕陽留下一双瓜」と 瓜」とあり、二回目は「艷陽天気満山花、 百友原

《訳》三人が同じ日に花見に出かけた 下に瓜が二個ある〔冬〕。 と交友して家族のように付き合った で心を無くしてもなお足りず〔秋〕、夕日の橋の [夏]。 春。 愁恨 百人

念註》 点を伸ばして〈橋〉の形を作る。その下に二点 (瓜 は字形を視覚的に連想する必要がある。「夕」の 第一句から第三句は離合法で解く。 第四句

> 199 万用

二個)

を置くと、「冬」の字になる。

六出粧成銀世界 無形無影透人懷 万紫千紅闘景開 輪皎魄照楼堂

字四

風花雪月

万書 台

【探精】「無形無影透人懐、四季能吹万物開。

どりで美しさを競うように咲く[花]。 六弁の花々 《訳》形も影もなく人の懐をとおる〔風〕。 粧成美景界、 輪皎月照楼台。」

色とり

堂を照らす〔月〕。

で世界を銀色に化粧する〔雪〕。明るい一輪が楼

《註》句ごとの文意から一文字を連想し、 て謎底の四字熟語と解く。 合わせ

123

六出

万用

韓信当年曾寄食

後来拜将①并封王

万用

縦然金玉如山積 世事悠々無了期 生好歹総由伊

不及蟾宮折桂枝

長命富貴

字四

[万書]【探精】〈同〉

生涯の良し悪しはすべてそれによる〔命〕。たと 《訳》世間の事は悠々として終わりがなく〔長〕、 え金銀財宝が山のように積んでいても〔富〕、月

で桂樹の枝を折ることに及ばない〔桂(貴)〕。

て謎底の四字熟語と解く。第四句は「桂」の同音 《註》句ごとの文意から一文字を連想し、合わせ

字の「貴」に置き換える。

202

万用 分同乾道之尊 位居万人之上

出乎双親膝下 立在一人之下

只因不教②耆年老 短命而亡在未央

字四

窮通寿夭

 (1) 【万書】不敬 ②【万書】一旦、【探精】不敬

なり王を封じられた 《訳》韓信はむかし食客だったが〔窮〕、後に将と 〔通〕。 ただ年長者に不敬を

働いたせいで〔寿〕、未央宮内でその短い生涯を

閉じた [夭]。

《註》句ごとの文意から一文字を連想し、合わせ

て謎底の四字熟語と解く。

字四

君臣父子

万用

西湖歌舞幾時休

有仙人留此迹

五兄五弟共交遊月不明兮水不流

湖字拆古字

【探精】周

《訳》万人の上に位置し〔君〕、一人の下に立つ〔臣〕。

乾道の尊みを分かち合い〔父〕、両親の膝下から

出た [子]。

て謎底の四字熟語と解く。

《註》句ごとの文意から一文字を連想し、合わせ

《主》育一可り「明」から育二可り「手」つきあってともに遊び楽しんだ。

名跡を世に残せるのはただ仙人のみ。

五兄五弟が

月は明るくないし水も流れていない。このような

の「五兄五弟」はすなわち「十人」、人を数えるを取り除くと謎底の「古」となる。また、第四句《註》第一句の「湖」から第二句の「月」と「水(氵)」

み合わても「古」となる。

助数詞は「口」であるため、「十」と「口」を組

204

万書

一字十四口 両口成丁両口小

圖

字一

【妙錦】【探精】〈同〉

つながっていなくて、二つは小さい。《訳》一文字に十四の口がある。そのうち二つは

古

【妙錦】〈同〉

《訳》西湖の歌舞はいつになったら休止するのか。

田茅草乱蓬鬆

呼童十個去耕耘

妙錦

205

にたどりつく。

万書

一人一個口 心 [中]懷不朽

字一

恩

(妙錦) 【竜頭】【探精】〈同〉

《訳》一人に一個の口、心に不朽を抱える。

《註》「一」「人」「口」「心」を組み合わせれば「恩

の字。

207

妙錦

黄昏鶏向 水辺啼 甚

人泥土不沾衣

遠見草中羊露角 心重整旧門楣

草若除時春已暮 只因日短費人工

草字拆日字

やすいが、実は「十」の字と四つの「口」である。 《註》「十四の口」を十四個の「口」の字と誤解し

「十」の字と四つの「口」を組み合わせると、「圖

訳》 でに暮れ、ただ日が短いため人工を費やした。 十人の童に耕作させる。 田んぼ一面にチガヤが乱れて生えている。 除草できた時には春がす

句の 註 第一句の「草」から第二句の「十」と第三

句の「日が短い」を「『日』の字より短い」 「草(艹)」を取り除けば「曰」。また、 と理 第四

解すれば、 同じく「日」の字を想起する。

字四

妙錦

十字頭上隹両点

勧君莫作斗字猜

訳》 門=悶]。 羊=觧(解)〕。一心に古い家門を立て直す〔心+ くへ見ると草の中から羊が角を出している〔角+ の衣なら泥土が付かないのか〔土+甚=堪〕。遠 て鳴いている 黄昏の時、 〔氵+酉=酒〕。 鶏 酉 が水辺〔氵〕に向かっ 甚人(なにびと)

謎底の四字熟語と解く。 《註》句ごとに離合法で一文字を解き、合わせて

ことなかれ。もし「斗」と解いたら、すなわち偽

の秀才だ。 《註》点二つに「隹」「十」を加えれば謎底の「準」

ずに、謎底文字のパーツとして捉えると解ける。

の出来上がり。つまり、「隹」を「ただ」と読ま

若作斗字猜 即是假秀才

字一

準

《訳》「十」の上に隹(ただ)二点。「斗」と解く



《訳》君と邂逅

ともに馬に乗って話をした。

(妙錦)

同

210

嘆古 三台

孔明 両下行兵共一営

敗則誦兵策

霸王文戦不曾贏 丹青把筆到天明

俗語二

《註》文意の連想で解く。

を赴く。

謎底:出会ったとしても馬から降りず、各々前途 あなたは西へ、私は東へ、急いで陽門を通った。

211

偶題

三台

負重 十人擡付紙棺材 不読経書便中来

一牛耕隴上 江心造起摘星台

俗語二

衆軽易挙 独立難成

|妙錦| 〈同〉

《訳》十人〔衆〕 で紙の棺桶 軽 を担ぐ。 経書 209

邂逅同君会 他郷遇故人 三台 乘騎共語談

西我東去 急速走陽門

俗語二 相逢不下馬 各自奔前程

王〔項羽〕は文章の競い合いで勝ったことがない。 絵を描き揮毫した。孔明は敗れば兵策を読み、 訳》 両方兵を率いて兵営を共にし、 夜明けまで

共君一夜話

勝読十年書

りも学んだ。

謎底:君と一晩中話していると、

十年分の勉強よ

対聯

三台

造化兼全痴懵亦能生万貫

仁恩方寸慈悲何用素三餐

俗語二

牛が負重して隴上で耕作する を読まずに科挙試験に合格した〔易挙〕。 〔独立〕。 川の真ん 一匹 . の

謎底:運命が良ければ機智はいらない。

心が善良

であれば菜食する必要はない。

註

文意の連想で解く。

《註》句ごとに二文字ずつ連想し、

の諺となる。

中に高い台を建てる 〔難成〕。 合わせて謎底

213

万書 家囊消索住城街

十万腰纏幽谷処 三千朱履共徘徊 縦有交朋不往来

俗語二

貧居鬧市無人識 富在深山有遠親

探精】

(同)

妙錦 珠

達との付き合いがない。 訳》 財産が少ない人は城内に住んでいても、 大金持ちは深い Щ 中に住 友

謎底:貧しい人は繁華街に住んでも知人がない。 んでも、多くの人が行き来するだろう。

金持ちが山の中に居ても遠い親戚が来る。

命好不用乖 心好不要斎

(妙錦) 同

影 命と運が両方良ければ無知な人でも億万長

者になれる。 もので、 慈悲な心があれば終日菜食する必要がな 仁と恩は小さいところから実践する

(,)

【妙錦】 【探精】

箘 (同) 214

万書

豊衣足食官居貴顕反成愁 陋巷箪瓢人静昼長無些事

俗語二

貧窮自在 富貴多憂

文意の連想で解く。

215

万書 言語何曾説汝曹

須教三省将吾度

俗語二 先量自己

未説他人

《訳》

あなたたちのことについて話したことがな

謎底:他人のことを言う前に、先に自分をはかる。 自分のことは必ず三省する。

註 文意の連想で解く。

《訳》狭くて汚い町で簡素に生活していれば、

216

周

万書

天生富貴何須巧 俗語

好命不用乖

訳》

生まれながら富貴であれば巧みになる必要

はない。

註

文意の連想で解く。

憂い事が多い。

謎底:生活は貧しいが自由がある。

富貴であるが

ると、

かえって憂鬱になる。

衣食共に満ち足りて、官吏になって高い地位に居 りが静かで、昼を長く感じ、何もやることがない。

万書

里長罵知県

不怕官 俗語 甲首懼里長 只怕官

【妙錦】 同

れる。 《訳》里長は知県の悪口を言い、 甲首は里長を恐

謎底:官を恐れず。 ただ官を恐れる。

《註》文意の連想で解く。里長と甲首は里甲制

丽

註》

文意の連想で解く。

清時代に行われた農村自治制度〕における呼称。 里は一一○戸で編成され、そのうち富裕な一○

戸を里長戸、残りの一〇〇戸を甲首戸とされた。 毎年里長一人、甲首一〇人が輪番に租税の徴収、

> 218 妙錦

里の治安維持に当たった。

謎底:運命が良ければ機智はいらない。

《註》文意の連想で解く。

製造且費心機 観燈須不打緊

俗語

看者容易做者難

訳》

燈籠を観賞するのは大したことではないが、

謎底:見るのは容易いが作るのは難しい。 作るのはそうとう大変である。

219 妙錦

悶々無言終日想 遥望青山一派光

家中寂寞又無糧 寡居浄室恨更長

俗語四

134

無柴 無米 思量 難過

【万書】第四句のみ

悶々と無言で一日中考えて〔思量〕、何もない部り〔無柴〕、家の中は物が少なく食料もない〔無米〕。《訳》遠くから眺めてみたら青き山は丸坊主であ

《註》文意の連想で解く。

過)]。

屋に一人でいると夜の長さが憎い〔越え難い

[事物名類]

嘆時

蜀国 **兵来計** 三台 芑非

至今千載尚含悲

鳥虫名二

軽薄忽然穿柳巷 橋辺専等売花児

杜宇 蝴蝶

《訳》 かない。千年経った今に至ってもなお悲しみを拭 蜀国に兵が攻めてきてすでに取り返しがつ

通っていった。 えないでいる。 軽くて薄い体で忽然と柳のまちを 橋の隣でただ花売りの子どもを

《註》文意の連想で解く。 る「杜宇」「蜀魂」「不如帰」は、 ホトトギスの異称であ 蜀が秦によって

待っている。

宇がホトトギスに変身して嘆き悲しんだという故 滅ぼされてしまったことを知った古蜀国 の君主杜

事に由来する。

221

咏物

挺々丰標染雪霜 破茅君論道処 三台

華表

帰来日已長

平生托跡水雲郷

鳥名二

鷺[鷥] 白鶴

氏兄弟が道を論ずる場所を知り、 すでに日が長い。

風景の清らかな地に身を寄せる。

《訳》まっすぐに立つ風姿は霜雪に染められ、生涯

《註》文意の連想で解く。 よく知られている。 「華表帰来」 鶴は 「仙家の霊鳥」 は道教 の仙人丁

令威の故事による。

222 懐古

三台

随行曾運蜀君糧

焼尾斉城一

陣

強

蜀道不通因爾鑿 東風纔起苦鞭戕

華表より帰って 仙人になった茅

獣名四

木牛 火牛 金牛

土牛

《訳》 に火をつけて一斉に敵陣へ走り込んだ。不通だっ かつて軍に随行し蜀の兵糧を運んだ。尻尾

かに吹きはじめて辛抱強く鞭を打つ。

た蜀道はなんじのために開鑿された。

東風が わ

ず

二句は 《註》「木牛」はすなわち諸葛亮の創案という、 馬の形に似た機械仕掛けの兵器・食糧運搬車。 『史記・田単伝』の「火牛の計」による。 4 第

第四句: 第三句は は 『蜀王本紀』「石牛糞金」 『魏書・鄧艾伝』 「獼猴騎士牛」による。 の故事による。

閑 脉 三台

船 翻笛子満湖浮 戦負将軍棄甲逃

赤壁洲頭栖冷夜 晓看露結盖征袍

薬名四

燕台 同

敗醤 海飄硝

宿砂仁

砒霜

(海螵蛸)

【妙錦】【竜頭】

【万用】【万書】第一 軍兵 旬 なし、

赤壁洲頭栖過夜、 暁来帯露掛征袍」とある。

「不勝将軍棄甲逃。

浮→漂(螵)、笛→簫 (蛸)]。 戦で負けた将軍 《訳》

船が転覆し笛が湖一

面に浮かんだ

(湖

<u>~</u>→海、

鎧を捨てて逃げた 〔敗将 (醤)]。冷たい夜に赤壁 朝になって戦袍

が朝露に覆われているのを見た の洲浜に野宿し 《註》文意の連想で解き、 [宿砂人 (仁)]、 一部の文字を同音字に

披

(砒)

霜。

224

対聯 三台

幅鸞笺拆開中無半個字

は

置き換える。

225

数行雁陣伝来果是一封書 薬名二

君のところに行く。君は自分のことを話さない。

私は君に向かって自分を探す。自分は先に

《訳》

白芷 信石

もない 《訳》 〔 白 紙 枚の便箋を開いて見たら、 (芷)]。 数羽の雁が陣を作って運ん 中には一文字

《註》文意の連想で解き、 できたのはやはり一通の手紙だ〔信実(石)〕。 一部の文字を同音字に

226

言志

三台

《註》文意の連想で解く。 君に会えば自分に会う。

満紙文光收不住 平生抱負許多才 夜来耿々逐三台 願逞英豪吐出来

物

起[衝]天箭

訳》 ると明るく三台星を追う。 て吐き出したい。文才が紙面に収まらず、夜にな 平生たくさんの才能を持っており、英豪ぶっ

《註》文意の連想で解く。

【妙錦】 同

友誚

三台

鏡 物 君家不説自家事

見了君家見自家 自家先得到君家

我向君家尋自家

述懷

本是江南一老叟 三台

身辺有個量天斗

誠実君子請帰来 能推貴賎与高低 軽薄小人急逐走 転豁須憑三分口

若還不信且回家 明朝另請人分剖

物

風車

するにはかならず三分の口を頼る。誠実な君子は ている。貴賤や高低を推し量ることができ、転運 訳 もとは江南の翁が一人、 天を量る斗を持っ

だ信じられないならとりあえず家に帰って、 にはほかの人に見てもらおう。 明日

呼び戻し、軽薄な小人は急いで追い払う。

もしま

念註》 において運気の流れを変える縁起物として知られ 文意の連想で解く。玩具の風車は民間信仰

228

自咏 生身潔浄心又聡 三台

有志金鸞呈表策

指日竜頭持抜起

擬将心事献重瞳

無能辺塞立奇功 欲逞英雄路未通

筆

訳》 身が潔白で心が聡明である。

英雄

の才能を

策すると志すが、辺境で奇功を立てる能力はない 誇示したいが道は通っていない。 に献じたい。 近いうちに状元として抜擢されれば、 官吏になって献 衷心を聖君

《註》文意の連想で解く。

述古 昔日人称虞世南 三台

229

誰知思邈留仙跡 遺下当年一鉄航 胸蔵万卷好児郎

[杭カ]

142

自咏

三台

常倚東方星斗照

朝々台上見君臣 費尽先生一片心

物

鍘薬刀

自従煅煉到如今

薬碾

訳》 虞世南という昔の人は、 学問に優れるい

男だった。孫思邈は仙跡を残し、

当時使っていた

鉄くいを落とした。

謎底:本箱/書棚、 薬研

《註》文意の連想で解く。 政治家。孫思邈は唐代の医者・ 虞世南は唐代の 道士、 後世に仙人 書家

として尊崇された。

231

述志 三台

若遇 解神在命得安康 正官並正印 縦有関時也不妨 経由険地 又何傷

物一

得られる。 影 わない。 しても悪い影響を受けないだろう。 解神 正官と正印に逢えば、危険な境地を通過 たとえ難関が立ちはだかってい 〔災厄を祓う神〕 が 命に在 れば安寧を ても構

訳》 鍛錬されてから今に至って、先生が苦心を

費やしてくれた。いつも東の星に照らされるおか

げで、 毎朝台の上で君臣と対面する。

謎底:薬草切り

註 文意の連想で解く。

東の星は道教に

お

7

木」を司る。

咏月

三台

当空皓魄

出塵寰

対面

無言楷笑顔

広寒昨夜風淡蕩

掛懸壁上映鳴鸞

用語である。 《註》「正官」 に読めるが、 第二句 謎面は占いのことを書いているよう 正印 o) は民間信仰における占い 「関」を 「通行人検問所」、

第三句の「正官並正印」を れ ば 第四句の 謎底の 路引 「険地」を「危険な地」と理解す (道しるべ)」にたどりつく。 「関所での正式な手続

> 註 文意の連想で解く。

衰将 三台

233

腹内無能難赴敵 身披金甲気昂々 凜々威風誰敢当 皇王勅命禦関防

物

門神

威風凛々にして誰も遮ることができない。 訳》 金の鎧を身にまとって気迫にあふれている。

受け、 関所と要塞を守る。

が無能で敵陣に赴くのは難しいが、

皇帝

の勅命 腹 の中

謎底:魔除けのために門扉に貼る神像

文意の連想で解く。

234

が 戸月

た。

笑顔で無言に向かい合った。

昨夜、

広寒 〔顔

訳》

月は塵寰

(世俗

!の世]

から出

て中天にか

かっ

鏡 物

の宮殿〕

には風が

のどかに吹いていて、

壁に掛かっている銅鈴に映されていた。

咏述 三台

生来 短短雨 身材 鴛鴦配合任拘 推

《訳》

生まれながら二人とも背丈が短い。

鴛

鴦

0

235

身帯銅鑼非舖 鋪 兵

小

々葫蘆繋在身

偶題

三台

只因 素手愁添満 物 教奴展転涙盈顋

磨子

「妙錦」「生下短矮両身材、 鴛鴦配合任拘推。 只因

毒手愁堆積、 交人展転涙盈顋。」 謎底は 「石磨_

だ白い手が憂愁を満ちあふれるほど盛り付けたた ように力を合わせて止まっても推してもい わらわはくるくる回らされ、 涙があごから零 た

れたのだ。

236

謎底:碾き臼

文意の連想で解く。

自述 大胆欺天不怕愆 三台

傘

応無果報与人見

改姓埋名做幾般 横遮人眼聳双肩 釐等

《訳》 (妙錦) 銅鑼を持っているが逓信兵ではない。 〈同〉

小さ

な瓢箪を身に着けている。 満天の星を背に集め、

何人と重軽を分別できるか。

謎底:りんばかり 釐 厘 を使って金銀などを

《註》文意の連想で解く。

量る竿秤

物

周天星斗羅吾背

能与幾人分重軽

咏夫婦

三台

和下睦

夫唱婦随

有情有意不相離

口啣絲錦之類

剪刀 物 訳》 大胆に天を欺き、 罪を恐れない。 横から人

ないはずなのに、どうして苗字を変え、名を伏せ 目を遮り、 両肩をそびやかす。 人に会う果報など

《註》文意の連想で解く。 第三句・第四句と謎底

の関係は未詳。

てしまうのか。

238

偶題

謎底:ハサミ

《註》文意の連想で解く。

遠観似真形 不堪走赴敵 三台 隠逸伴閑人 近敲不做声

物一

石鼓木

【妙錦】〈同〉

《訳》遠くから見れば本物の形に似ていて、 で叩くと音はしない。 敵陣 へ赴くのは難しいが、 近く

隠れ住んで閑人の伴となる。 謎底:抱鼓型門石

註 文意の連想で解く。

を銜えている。 は従う。愛情があって離れず、 口には絹や錦の類

訳》

上も下も和睦していて、

夫の言うことに妻

146

述志 経綸事業成 各抱錦秀才 三台 不幸叨湯沐 紛々入場屋

《註》文意の連想で解く。「心」

を蝋燭の

理解する。

239

修真

若能発却心頭火 能明万事在心機 三台

天地昭彰不昧形 失却心兮不明矣

燭

物

【妙錦】〈同〉

照らすだろう。 きれば、どんな物でも隠されることなく、天地を さを失う。心の火をことごとく発することさえで 《訳》心の動きで万事に明るい。 心を失えば明る

芯」と

偶題 欲随 少時青々老日黄 遊子天涯去

奈被傍人説短長 幾多辛苦得成双 三台

物

自纏自縛棄残生

因甚心中常不足

蚕繭

(妙錦) 来

経綸の事業を完成したが、不幸にも熱湯を浴びせ 《訳》各々錦繍の才を抱えて、続々と部屋に入った。

られた。 自縄自縛して余生を捨て、 何のために心

の中がつねに満足しないのか。

熱湯につける工程は繭

の糸を取るためにある。 《註》文意の連想で解く。

241

物

有感

三台

独自

一身供一口

身何

天生此物巧機多

織尽綾羅不用梭 身無奈一

《訳》 くなる。たくさんの辛苦を経てようやく対となる。 若い頃は青々としていて、 年を取ると黄色

周りの人に難癖をつけられる。 旅人とともに遠い異郷に行きたいが、いかんせん

文意の連想で解く。

243

三台

文意の連想で解く。

適興

凝墨点屏弹不去 擾々営々去復回

擲毫揮剣送難開

逐類呼群趁熱来

物

訳》 がやがやと行き来して、 蝿

いても離れないし、 熱いうちに来る。屏風に付いた墨の滴のように弾 筆を投げて剣を揮っても追い

出すことが難しい。 《註》文意の連想で解く。

題盗 三台

244

身細脚長随夏至 小冠鳴鑼幕下存 燕王一 磨牙吮血待黄昏 到便騰雲

蜘蛛 物

《訳》生まれながら巧みな技を多く持っている。 [万書] 【探精】

綾羅を織りつくすのに梭は要らない。ただ体一つ に口一つ、やむなくひとりでやるしかない。

148

類を追い群を呼び

遣興

三台

有時 天生

旦分別散

也被傍人説是非 暮々朝々永不離

物

対好夫妻

蚊 物

る。 足は長く、夏とともに到来する。 訳》 牙を磨き血を吸い黄昏時を待つ。 小さい盗賊が銅鑼を鳴らし帳幕の下に現れ 燕王が来たらす 身は細くて

あり、

通常二個セットで床に投げて使用する。

落

(どの面が上かなど)で吉凶を占う。

ちた状態

ぐに雲に乗って飛んでいく。

註

文意の連想で解く。

第四句と謎底の関係

未詳。 燕王とは明の永楽帝のことか。

にとやかく言われる。

れない。

たまに方々に分かれていたら、

周

りの人

ともいう。半月形の竹製または木製の占い道具で 《註》文意の連想で解く。 「筊子」は

「跋杯」など

246

は

燕台 佳人撲臉淡施粧

鬂上謾栽黄色菊 頻将 揭鏡無瘕浄且 鉛翠画 眉 郎 光

薬名四

軽粉 銅青 剪金花 青黛

(妙錦) 同

竜頭 句の排列が異なる。

粉。 《訳》佳人が顔におしろいを付け軽く化粧した〔軽 鏡を取って見ればキズがなくつやつやであ

訳》 天成のい い夫婦で、 四六時中一 緒に i

て離

燕台

《註》句ごとの文意から薬名を一つ連想する。

[剪金花]、眉を描いてくれる夫はよく白粉と

7 る

〔銅青〕。 いたずらに黄色い菊の花を鬢にさし

まゆずみを買ってくる〔青黛〕。

を連想する。一部の文字は類音字に置き換える。

《註》句ごとに「花」の字を除いた花名の二文字

248

搽抹謾敷鉛黛翠 昭君出塞玉容嬌 終朝粧罷自無聊 却怕飛埃碎石揺

花名四

芙蓉花 金沙花 荼蘩花 茉莉花

燕台

《訳》 昭君が国境から出た時は花のかんばせだっ

が怖かった〔驚(金)沙〕。 〔婦容(芙蓉)〕。 ただ飛んでくる塵埃と石の粒 いたずらに白粉をつ

た

りでに終日手持ち無沙汰 〔漠麗 (茉莉)]。 け眉を描き〔塗眉(荼蘩)〕、化粧を終えるとひと

《註》句ごとに「花」の字を除いた花名の二文字 を連想する。一部の文字は類音字に置き換える。

八十の婆さんが一人で寝る〔母単(牡丹)〕。

[子驚(紫荊)]。

150

八十婆々独自眠

一个鶏蛋抱三年

孩児又怕爹娘打 水上浮来一片磚 花名四

(妙錦) 第一句のみ 石榴花 芙蓉花

紫荊花

牡丹花

【探精】

前の二句のみ

【万書】【探精】卵

《訳》 枚の磚が水に浮 の卵を三年間抱く〔孵冗(芙蓉)〕。

いて流

れてきた

〔石流

(榴)]。

子どもは両親にぶたれるのが怖い

個

える。

250

燕台

剛刀細薄裁

葛

果名一

249

燕台 鶏唱行人去

果名

棗

【万書】【妙錦】【探精】「鶏唱行人就去」

《訳》鶏が鳴くと旅人は出立する〔早(棗)〕。

《註》文意から一文字を連想し、 同音字に置き換

影

黄色く丸く、甘くておいしい。

252

燕台 金丸甜味美

燕台

従今去不回

桃

果名

【万書】 【妙錦】 【探精】 「従今走去不回」

註 訳

文意から一文字を連想し、類音字に置き換

堅い刀で細く薄く切る

割

(葛)]。

える。

251

果名

柑

《註》「黄色く丸い」で形を表し、「甘」を同音字

の「柑」に置き換える。

燕台

為人好多事 果名

える。

《註》文意から一文字を連想し、

同音字に置き換

訳

ひとたび放り投げてしまう

離

(梨)]。

果名 梨

253

燕台

える。

《註》文意から一文字を連想し、

同音字に置き換

訳

余計な世話を焼きたがる

攬

(欖)]

(桃)]。

旦成拋撇

255

燕台

える。

《註》文意から一文字を連想し、

同音字に置き換

廊廟之材応見取 雨中粧点望中黄 家々織就綺羅裳 侍立深山分外長

樹名四

槐樹

楓樹 柏樹

れるべし。家々に美しい衣服が織り上げられる。 侍立してことのほか久しい。 訳》 雨の中に黄色くいろどりを添える。 廊廟の材として取ら 奥山で

後聴』の「槐花雨潤新秋地」、第二句は杜牧『山行』 《註》文意の連想で解く。第一句は白居易『秘省

欖

逃

《訳》今からここを去って二度と帰らない

152

5

れてい

る。

蚕は桑の葉で飼育する。

槐の花は黄色い。

柏は廟堂の建築材としてよく知

の「車停坐愛楓林晩」をそれぞれ取り入れている。

う。

燕台

宰相堂々沐聖恩 時不改旧 家風 四 年独占春魁首 .季長青無凋敗

桂樹 松樹 竹 梅樹

樹名四

魁を独占する。 て昔ながらの家風を改めることなし。 う枯れずに常緑 訳 宰相、堂々にして聖恩にあずか Ų 衰えを見せない。 る。 毎年の春の 四 一季に 年 お Ü Ю

進士の試験に首席で合格することを「折桂」とい 之一枝、昆山之片玉」の語から転じて、 《註》文意の連想で解く。 『晉書・郤詵伝』「桂林 唐以降、

知られている。

257

万用

休図自己営生計 幅花箋決不欺 須識高堂白髮稀 相煩寄於我孩児

薬名四

信石 附子 独活 知母

【万書】 【探精】 〈同

子。 いで 《訳》美しい便箋一枚、決して偽りのことばはな ていることを忘れないで い〔信実(石)〕。我が子に送ってちょうだい 〔手紙の内容〕 一人で生計を立てようとしな [独活]、親が白髪も薄くなるほど年を取っ [知母]。 阏

修寄音書無筆踪

薬名一 白芷

259

万用

《註》文意から「薬がない=没薬」と連想する。

《訳》医者のみせに何もかもが売り切れた。

【万書】 【探精】 〈同〉

258

万用

置き換える。

《註》文意の連想で解く。

一部の文字を同音字に

医生舗裏尽皆空 薬名一

没薬

260

万用

船行水急帆休掛

薬名 防風

を掛けないで。

《訳》水流の激しいところで船を進めるときは帆

【万書】 【探精】 〈同〉

《註》文意の連想で解く。

【探精】休

《訳》手紙をしたためて送ったというのに字が書

かれていない。

多く、

万用

江上乘騎赴水潮

海馬 薬名

264

万用

(万書) 同 262

ともいう)と解く。

261

活石

万用

江上乘騎赴水潮 薬名

【万書】 【探精】 〈同〉

註》 《訳》雨が止んだ道端で一人の翁が転んだ。 明清時代の街の道は石板で敷かれたものが

「滑る石」という意味で「滑石」(「活石」

薷

に置き換える。

香薷

263

万用 秀才身上帯馡草

薬名

【万書】〈同〉 《註》「秀才」から連想した「儒」を同音字の 《訳》秀才が香草を身に着けている。

薬名一

黑夜冰人強説婚

烏梅

影》 川の上で乗って潮に赴く。

《註》文意の連想で解く。

万書

客人途裏想家郷 鳥名一

鷺鷥

267

万書

株古木都無葉 鳥名一

老鴉

探精 〈同〉 に置き換える。

《註》文意から「路思」を連想し、類音字の「鷺鷥」

謎底:コサギ

《訳》旅人は道中で故郷を想う。

【探精】〈同〉

【万書】〈同〉

する。「媒」を同音字の「梅」に置き換える。 《註》「黒」で「鳥」、「見合い話」で「媒」を連想

《訳》暗い夜中に仲人がむりやり見合い話をする。

266

万書 一八佳人巧様粧

鳥名一

画眉

《訳》十六の佳人が巧みに化粧する。 【探精】〈同〉

謎底:ホオジロ

置き換える。

念註》 老樹昏鴉」による。 謎底:カラス 訳 一本の古木、 元・馬致遠 『天浄沙 葉が一枚もない。

秋思』

の名句

「枯藤

満天星斗煥文章

曾伴君

上

269

西江月 日裏潜蔵収跡 万書

夜来遊蕩飛揚

雨打風吹不滅 燈前月下無光 王路-

虫名

窓前曾伴読書郎

不比尋常模様

蛍

探精】 同

(妙錦)

斂

訳》 び回る。満天の星が文章を光らせ、 昼間は姿を消し、 夜になるとゆらゆらと飛 かつては君王

に付き添った。雨に打たれても風に吹かれても明 かりが消えない 窓際で相伴した学郎は、 が、 燈台や月の下では光らない。 普通の人とは違って

いた。 昔、 268

万書

算来六十四年長

鳥名 八哥

【探精】 (同)

《訳》数えてみれば六十四年経った。

謎底:ハッカチョウ

《註》六十四と八の関係からすると、「八卦」の「卦 を類音字の「哥」に置き換えて解くものと推測さ

れるが、確信はない。

唐・杜牧 『秋夕』 など

註》

文意の連想で解く。

万書

只 因 · 打鼓吹簫入洞房 紅羅帳裏戱鴛鴦

[貪恋顔和色 不顧無常見閻王

虫名

蚊

【探精】 (同)

(妙錦) 愛

ばかりに、 赤い帳の中で鴛鴦の戯れをする。 《訳》鼓を打ち鳴らし簫を吹きながら寝室に入り、 無常 〔死者の魂を地獄に送る鬼神〕を 美貌に執着する

> 註 文意の連想で解く。

宮女の寂しさ(文人の失意)を象徴するものとし 有名な閨怨詩によって、蛍は君主の寵愛を失った

めてその光で書を読む故事を取り入れている。 て知られている。最後の二句は晉の車胤が蛍を集

> 271 万書

鮮血不知何処去 脱了紅袍愁又愁 許多骸骨撒街頭 剛刀碎割不停留

果名

甘蔗

【妙錦】【探精】〈同〉

《訳》赤い袍を脱がされ苦しみが絶えず、

に止まることなく細かく切られる。

鮮血はどこへ

堅い刀

流したか分からずに、たくさんの骸骨が道端で散 らばった。

謎底:さとうきび

《註》 文意の連想で解く。

272 万書

みずに閻魔王のもとにいく。

158

んでいる。

万書

屠子削骨不干净 果名

蓮肉

273

影

勉強せずに窓辺で横になる。

【妙錦】【探精】

同

《註》文意で「怠け者=懶人」を連想し、

同音字

「欖仁」に置き換える。

謎底:ハスの花托

《註》文意からハスの花托の構造を連想する。

275

万書

五徳兼全更羨頂門有彩

雖是共娘生 緑絹結楼台 各人独自宿 弟兄十五六

蓮蓬 果名

(妙錦) 【探精】〈同〉

影 緑の絹で楼台を結んでいる。 兄弟は十五六

人いる。 同じ母から生まれたのに、 各々一人で住

274

万書

不去読書卧小窓

果名一

影 註 連」を同音字の 文意で「肉がついてい 肉屋さんが骨をきれいに削らなかった。 蓮 に置き換える。 る=連肉」

【妙錦】【探精】〈同〉

を連想し、

百川俱会須誇艷麗無双

花名二

鶏冠花 海棠花

(妙錦) 探精】 同

《訳》五徳(温・良・恭・倹・譲)

をすべて備え

ていて、門の上を色とりどりの絹で飾られている。

《註》文意の連想で解く。「頂門」は「頭のてっぺ 多くの河が合流し艶麗無双と讃えるべし。

川倶会」で「海」、さらに、「一堂に会する」で「堂」 ん」という意味もあるため、鶏冠を連想する。「百

を連想し、 同音字の「棠」に置き換える。

万書 不要人間更歳月 山居不記春与秋 扶依此物度年流 但願皇王万々秋

物

皇曆

妙錦 同

探精】

ら 《訳》山に住んでいると月日が分からなくなるか この物に頼って年の流れをはかる。

歳月が変わらずに、

ただ皇帝の治世がいつまでも

世 . の 中

続くことを願う。 《註》文意の連想で解く。

吉凶宜忌を説く中国の伝統的な行事歴である。 皇歴は 「黄歴」ともいう。

277

万書

蟾宮一口小明塘 一十四条花巷走 巷々能会做文章 一枝鉄箭射南方

物

羅経

本是地蔵

出世

巧製一団円器 便有傷人之意

278

万書

《訳》月に小さな明る が南に射られている。 【妙錦】〈同〉

い池があり、

本の鉄の矢

謎底:弾丸

《註》文意の連想で解く。

二十四本の花巷を歩き、

謎底: の巷も文章の達人がいる。 羅針盤

念註》 文意から羅針盤の形を連想する。

279

妙錦 農事時当五月中

扶犁引犢連児出 牯牸 邀兄 挿蒔 勤労卧

[隴雲 耕 耘

薬名四

半夏 昆布 牛旁子 牛膝

竜頭 句の排列が異なる。

誘って田植えをする〔(苗を)配置する→布〕。 農事は五月に行うべし [半夏]。 兄 昆 小 を

牛を曳いて犂(うしぐわ)に手を添え、子どもを

連れ出す〔牛旁子〕。牡牛も牝牛もよく働いて田

んぼのほとりに臥す〔牛膝 《註》文意で漢字を連想し、 薬名にたどりつく。 (を折って腹ばいに)〕。

物

身体方纔得乾

弾子

(妙錦) 和気

《訳》もともとは地蔵が世に現れ、 みに作った。 体が陽の気を受けたばかりなのに、 丸い道具を巧

人を傷つける意図を持った。

妙 錦

換えれば、

薬名にたどりつく。

雲雨 来時 我独当 黄昏両々入蘭房

妙錦 憶昔倉惶別意長

与君執手上河梁

薬名四

家書昨得迢遥達 蒺藜 遺下寒衣附僕郎

連喬 遠至 劉寄奴

昔恋人と慌てて分かれる時のことを思い出 句の排列が異なる。「惜」

《訳》

竜頭

す〔記離(蒺藜)〕。君の手を取って橋を登った〔連 (喬)]。 手紙は昨日遠い地に到着した〔遠至〕。

橋

冬服を残して召使に送った 《註》文意で漢字を連想し、 留 (劉) 寄奴〕。

部を同音字に置き

282

妙錦

有情即 伴郎雲雨後 棄我 棄却在門旁 無情我伴郎

雨 傘

物

奈何 旦肝腸断 棄旧迎新搬路傍

物

草鞋

対になって閨房に入る。 訳》 雲雨が来たら私が引き受ける。夕暮 V かんせん断腸し

迎らえれる。

えば、

古いものは道端に捨てられ、

新しいもの

てしま

れ

時

に

《註》文意の連想で解く。

訳》 情があっても私はすぐに捨てられ、 情 が な

妙錦

283

妙錦

した後、門辺に捨てられる。 くても私はあなたに付きそう。

雨が去るまでお供

《註》文意の連想で解く。

蔡倫功造白玉城 夜来等待烟墩発 呉兵征伐楚斉人 裏頭軍馬外分明

物

走馬灯

影》 る軍馬は外からはっきりと見える。 蔡倫が功を立て白玉の城を造った。 烽火が起こる 中 にあ

夜まで待てば、呉の兵が楚と斉を征伐する。

285

妙錦

《註》文意の連想で解く。 てよく知られている。 蔡倫は紙の発明者とし

物

請客未至先尋我

吃尽塩油醤醋茶 至今零落甚堪嗟

一十年前出富家

抹棹布

訳》 は落ちぶれて嘆かわしい。 二十年前に金持ちの家から生まれたが、 人は客が来る前にまず

今

謎底:食卓拭き

た。

私を探し、私は塩・油・醤・醋・茶、

すべて味わっ

註 文意の連想で解く。

昭君 我有

馬上弾

弾尽天下曲 絃蔵在其腹

張琴

物

妙錦

千里随身不恋家

水火刀兵都不怕

日落西山不見他 不貪酒飲不貪花

物一

墨斗

隠されている。王昭君が馬上でそれを弾き、 訳》 私は琴を一張持っている。 琴弦はその腹に

中の曲を弾き尽した。

謎底:すみつぼ

《註》文意からすみつぼの構造を連想する。

287

世の

謎底:人の影 えなくなる。

註

文意の連想で解く。

妙錦

小小 箇身材

家住 泓秋水 被人換(喚)作嬰孩 生来不惹塵埃

物

瞳人

秋の清らかな水に住み、 《註》文意の連想で「瞳」と解く。 体は小さいが、生まれながら塵をつかない。 人に赤ん坊と呼ばれる。 第四句は「童」

を同音字の 「瞳」に置き換える。

288

か

人影

《訳》千里を行っても付いてきて、 家にはまった

なる災厄と戦禍も恐れないが、

日が沈むと姿が見

く未練がない。

酒にも花にも執着しないし、

妙錦

たことを一人で嘆き

離

(梨)〕、服を引っ張るほ

ど別れるに忍びなくて馬の手綱を引いた〔施留(石

きった〔夜合〕。柳を折って夫と離れ離れになっ

の誤記か)〕、夜に家じゅうの門を閉じ部屋をたて

榴)]。

連想する。一部の文字は類音字に置き換える。《註》句ごとに「花」の字を除いた花名の文字を

289

放火燒林不是火

自嘆分鸞傷柳別 牽衣難捨挽遊疆(繮)飄々細雨洒南窓 宵掩重門緊閉房

潑雪花 夜合花 梨花 石榴花

花名四

細雨がひらりと南窓に零れ落ち〔潑雪(雨

訳

E 薬名

紅花を放ち味を変

《註》文意からベニバナの群生を連想するものか。《訳》火を放ち林を焼いたのは火ではない。

165

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	書	謎
放之則弥六合 卷之則退蔵於密	怪力乱神	学而時習之 不亦悦乎	草木生之 禽獣居之	晦盲否塞 熹自早歳 為児嬉戲 天地懸隔	君子有三畏 畏天命 畏大人 畏聖人之言	足食足兵 民信之矣	見其生 不忍見其死 聞其声 不忍食其肉	鳥之将死 其鳴也哀 人之将死 其言也善	事君尽礼 人以為諂也	事君数 斯辱矣	治則進 乱則退	流連荒亡	不仁不智 無礼無義	諫行言聴 膏沢下於民 有故而去	[書句類]	謎底リスト
32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16
隠悪而揚善	去讒遠色	至死不変 死而不厭	其味無窮	巨細畢挙	以天下之大聖 行天下之士	災害並至	生之者衆	財聚則民散 財散則民聚	亡人无以為宝	食而不知其味	視而不見 听而不聞	十目所視	日々新	前王不忘	則其書雖存 而知者鮮矣	天運循環 無所逃罪

48 為其殺是童子而征之	楽民之楽者 民亦楽其楽	47 憂民之憂者 民亦憂其憂	46 夏日則飲水 冬日則飲湯	45 有事弟子服其労 有酒食先生饌	44 三軍可奪帥也 匹夫不可奪志也	43 与朋友交言而有信	42 事君能致其身	41 似不能言者	40 不為酒困	39 勇者不惧	38 去喪無所不佩	37 於吾言無所不悦	36 発憤忘食 楽以忘憂	35 道不行 乘桴浮於海	34 学而時習之	33 学而第一
61 弦歌酒宴	60 綺廻漢恵 説感武丁	59 楽殊貴賤 礼別尊卑	58 楽殊貴賤	57 何遵約法	56 知己知彼 百戦百勝	一為公与相 一為馬前卒	55 両家同(各)生子 賢愚同一初	聞人之善疾(嫉)之 聞人之悪揚之	54 惟楽戯語(談) 莫思古道	53 夜行以燭 無燭即(則)止	『古文類》		52 陟彼崔嵬 我馬旭尵	51 乾道成男 坤道成女	50 内作色荒 外作禽荒	49 周旋中規 折旋中矩

75 74 73 72 71 70 69 68 [書名類] 蒙求 礼記 易経 書経 詩経 千家詩 対類 大学 春秋

67 66 65 64 63 62 孤陋寡聞 器欲難量 府羅将相

節義廉退 坐朝問道 多士是寧

垂拱平章

中庸

論語

孟子

[大明律類] 沉溺公文 弁問 脱漏戸口 擅起官軍

88 87 86

私造印信 主将不固守

越渡関津

私船下海

妻妾失序 (明

89

90

冤枉 尊卑為婚

同姓為婚

82 81 80 79 84 83 85 十九史 夢書 棋勢 本草 通書 夢書 居家必用

78

洪武正韻 明心宝鑑

77

169

103 102 101 100 99 98 97 96 95 94 93 **官 9**2 91 学 待 繍 給 同 員 探 招 春 司 兵 **類** 上 (褻) 浣神明

同知 経歴

117 116 115 114 113 **人名** 韓 張 関 伊 孫権 **類** 山 涛 明

建陽県 保寧府 吉安府 興国 雷州 鳳翔 貴州 重慶 天台県 府 州 府 高州 饒州 候官県 武寧州 汶上県 吉安府 湖州 池州 貴渓県 新建県 彭沢県 重慶府 瑞州 通州 開封府 河陽県

132 131 130 129 128 127 126 125

親衰老 只恐夜深花睡去 詩家清景在新春 有約不来過夜半 春色悩人眠不得

朱顔非故 臨行時掇賺人的巧舌頭 人迢々書未帰 詞 曲 類 緑雲懶去梳

指帰期約定在九月九

妻女嬌

万里関山音信杳

奈画

眉 人遠

傅粉郎· 去

指下余音不似

前

孩児一去無音耗

更深背母

124 123 122 121 120 119 118

樊噲 閔子 子貢 孟子 子思 霸王 顔 回

子夏

子 張 子游

149 148 147 146 145 144 143 142 141 140 139 138 137 136 135 134 133

忍餓担飢何 但逢佳節約

百 重

Ï 陪

成名天下知 家無読書子 天子重英豪

道院迎仙客 庭栽棲鳳竹 書堂隠相 池養化竜

閑坐小窓読周 一年好景君須記 如 易 錦 多少功夫織得成 今日花開 不知春去幾多時 又一 年

洛陽三月春

皓魄当空暁鏡

昇

夜深微雨

酔初

日暮詩成天又雪

銀漢無声転玉盤

164 163 162 161 160 159 158 157 156 155

香柳娘 三学士 錦堂月 生査子 焼夜香

惜奴嬌

誤佳期 好事近 朝天子 帰朝歓 泣顔回 耍孩児 集賢賓 金銭花 夜行船

酔扶帰

意不尽 懶画 集賢賓 鮑老催

綉停針

酔

i娘児

154 153 152 151 150

杜鵑枝上月三更 蝴蝶夢中家万里

臘月梅

石榴花

水遠山長処々同 無月不登楼 謝却海棠飛尽絮

[牌類]

伝言玉女

誤佳 崩

羅帳裏

憶秦娥

歩々嬌

惜奴嬌

上馬嬌

鋪地錦

怨相思

傍粧台 憶多嬌

178 177 176 175 174 173 172

項字拆一字

勝字拆夫字

君子不器

瑞鶴仙

朱字拆犢字 戦字拆 [[]]田十] (卑) 字 騰字拆夫字

166 165

蘇秦佩剣

七星剣 十月応小陽春 楚漢争鋒 鐘旭抹額

195 194 193 192 191 190 189 188 187 186 185 184 183 182 181 180 179

門 忠孝 晶 悲歓離合 龍 言行 時字拆肘字 正 極 仁義礼智 富貴貧賎 風花雪月 天官賜福 勤謹和緩 秋字拆栗字 儒字拆耍字 斗字拆个字 字拆肯字 (徳) 廉

節 工容

210 209

俗語類

共君一夜話

勝読十年書

208 207 206 205 204 203 202 201 200 199 198 197 196

窮通寿夭長命富貴

風花雪月 春夏秋冬 天地

人和

好双大脚

準酒草恩

草字拆 日字 湖字拆古字

啚

225 224 223 222 221 220

火牛

金牛

白芷 海飄硝 木牛 鏡

信石

(海螵蛸)

敗醤

宿砂仁

219 218 217 216 215 214 213 212 211

未説他人 貧窮自在

先量自己

富貴多憂

貧居鬧

市無人識

富在深山有遠親

筆 風 起

重

[衝]

天箭

命好不用乖 衆軽易挙

心好不要斎

独立難成

不怕官 好命不用乖 無米

看者容易做者難 只怕官 思量

難過

土牛 白鶴

剪刀

(ハサミ)

石鼓木(抱鼓型門石)

鷺

(コサギ)

蝴蝶

物名類 杜宇ス

砒霜

242 241 240 239 238 237 236 235 234 233 232 231 230 229 228 227 226

磨子

(碾き臼)

釐等

(りんばかり)

傘

蚕繭 蜘蛛 草鞋

燭

、魔除けのために門扉に貼る神像

路引

(道しるべ)

釟薬刀(薬草切り)

薬碾

(本箱/書棚、

鏡

259 258 257 256 255 254 253 252 251 250 249 248 247 246 245 244 243

芙蓉花 没薬 梨 軽粉 筊子 蚊 白芷 桂 槐 欖 桃 柑 葛 棗 石 蝿 信 榴花 石 樹

松樹 附子 楓樹

独活 竹 柏樹 梅 知母 樹 桑樹 金沙花 芙蓉花 荼蘩花 紫荊花 牡丹花 茉莉花

(半月形の竹製または木製の占い道具) 青黛

海馬

活 防 風

香薷

銅青

剪金花

276 275 274 273 272 271 270 269 268 267 266 265 264 263 262 261 260

老鴉 画眉 鷺鷥 烏梅

(カラス) (ホオジロ (コサギ)

鶏冠花 欖仁 蓮肉 甘蔗

(ハスの花托) (さとうきび) 蚊 蛍 八哥

皇曆 海棠花

(吉凶宜忌を説く中国 の伝統的な行事

曆

289 288 287 286 285 284 283 282 281 280 279 278 277

走馬灯

草鞋 蒺藜 半夏 弾子

> 連喬 昆布

> 劉寄奴 牛膝

> 牛旁子 遠至

雨 傘 羅針盤

(弾丸)

紅花 瞳

潑雪花

抹棹布 墨斗(すみつぼ) (食卓拭き)

梨花 石榴花

編 者 呉 修喆 (Wu Xiuzhe / ご・しゅうてつ)

1983 年、中国浙江省生まれ。華東師範大学日本語学科卒業。復旦大学中文系文芸学専攻修士課程在学中、國學院大學文学研究科伝承文学コースに一年交換留学。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。博士(学術)。帝京科学大学非常勤講師を経て、現在は独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所アソシエイトフェロー。研究分野は漢字文化史、地域文化研究。

明末日用類書燈謎選集

2023 (令和 5) 年 2 月 28 日 第 1 版第 1 刷発行

ISBN 978-4-86766-000-3 C0098 © 2023 Wu Xiuzhe

発行所 株式会社 文学 通信

〒 114-0001 東京都北区東十条 1-18-1 東十条ビル 1-101 電話 03-5939-9027 Fax 03-5939-9094 メール info@bungaku-report.com ウェブ https://bungaku-report.com

発行人 岡田圭介



ご意見・ご感想はこちらからも送れます。上記のQRコードを読み取ってください。

※非売品・PDF 版のみ発行